教養学部報

東京大学 教養学部
The University of Tokyo, Komaba
College of Arts and Sciences
2021年2月1日
発行：教養学部報委員会

1面
駒場をあとに　ドゥヴォス・パトリック
送る言葉　河合祥一郎
2面
駒場をあとに　安岡治子
送る言葉　渡邊日日
本の棚　高橋英海
3面
駒場をあとに　伊藤元己
送る言葉　吉田丈人
4面
駒場をあとに　村田昌之
送る言葉　佐藤守俊
現場・出来事・比較　田原史起
5面
駒場をあとに　高橋哲哉
送る言葉　森元庸介
6面
駒場をあとに　岩本通弥
送る言葉　箭内　匡
日本進化学会学会賞・木村資生記念学術賞の受賞に際して　金子邦彦
7面
駒場をあとに　エリス俊子
送る言葉　小林宜子
8面
駒場をあとに　池上俊一
送る言葉　田中　創
私達の時間スケールでみえる「ガラス」を理解する　水野英如
9面
駒場をあとに　寺澤　盾
送る言葉　大石和欣
10面
時に沿って　宇野好宣
伊山　修
晝間　敬
岩井智弘

駒場をあとに

駒場の、ちょっと生焼けマドレーヌ

ドゥヴォス・パトリック

最後の日、正門を背にしてキャンパスから遠ざかっていく彼（自分）の姿を想像する。途中できっと、振り返るだろう。もう一度、何百回、何千回と眺めた風景を見る。このごろ激しくなった気候の変化が老化を早めたが、それでもまだ堂々とそびえる一号館前の楠を眺める（博物館前の大好きなヒマラヤ杉はもう視野に入らない）。その木陰で学生、同僚、外国の客人と交わした立ち話。自分がかかわった講演会、シンポジウム、ワークショップに足を運んで下さった田中泯さん、岡田利規さん、はるばる来て下さったエドゥアール・グリッサン氏、ジャック・ランシエール先生、アンリ・メショニック先生、ピエール・バイヤール先生、アラン・ブロサ先生、ヴァレール・ノヴァリナ氏といった巨匠達を、この正門前で出迎え、そしてお別れしたこと。ベルギーの小説家ジャン・フィリップ＝トゥーサンに演じてもらったフランス語初級会話のスケッチの撮影シーン。そうしたことを長々と思い出すのだろう。芝居の観過ぎでものを素直に見られなくなったせいか、ひょっとしたら『忠臣蔵』の城明け渡しの場を彷彿するかも知れない。城の赤い門から花道へ一歩一歩離れていき、進んだり立ちすくんだりしながら、深く思案する由良之助の引っ込みを、烏滸がましくも自分に重ねながら…。映画監督セルゲイ・エイゼンシュテインが論じた、この場面における主人公の内的な時間の複雑な流れを音楽や空間の表象の次々と大きく変化する見事な演出を想像で実感してみるだけだが。ハムレットが「The time is out of joint」とかすかにつぶやく声が聞こえてきそうだ。（河合祥一郎訳では「いまの世の中はたがが外れている」になっているが、仏訳ではtimeは「時間」とよく解釈されており、誤訳だとしても効果的だ）。

何十年の記憶をたぐり寄せるための工夫や距離を、まだ探る必要がある。そもそもなぜ、浮き草の自分は地球のなかでこの場所に選ばれ、人生の半分近い年月をここで過ごしてきたのか。最初にこの門をくぐったのはいつだったろう。九二年の採用より更なる昔で、確か八四年秋からの二度目の日本留学の時だったはずだ。留学とは、又大げさな言葉。生活を保障する碌な食扶持もなく、パリで時折お会いしていた渡邊守章先生のハンコが押された指導教員承諾書を唯一の命綱として、不安を全身で覚えながら、この正門をくぐったことを思い出す。守章先生は当時ジェネーブ大学に客員教授として招聘されていたため、代わって高橋康也先生が私を担当して下さった。二年間のうち、先生の授業に何回出席したのかは恥ずかしくて言えないが、これが縁になったか、その数年後に自分がかかわったベルギーでの大規模な日本展の際、蓮實重彦先生にお目にかかる機会を得た。その間の一九八八年に、お名前を挙げた三名の大先生は「表象文化論」という文化研究のための新しい学科を駒場に創設された。そんなこととはつゆ知らず、日本に戻ってきていた一九九一年の秋に突然の電話が。「表象に来ないか」というお誘いだった。ええ？非常勤でも、外国人講師でもなく、助教授のポストというだけにますます信じられず、お伽話に巻き込まれたかのように少しも実感が湧かなかった。表象文化論のいわゆる「神々の時代」ならではの天の恵みか奇跡だったのだろうか？ふたを開けてみれば、八〇年代から中曽根首相が促進した世界の大学と競争できる大学の国際化が背景にあり、この政策の遅れた副産物として、私はいわば生まれ変わることになったのだ。どれほどの重責を前提とするポストなのか、当時は充分に意識していなかった。大学を世界へと開くプロセスは、レーガンやサッチャーによるネオリベラリズムが加速させたグローバリゼーションの一環といえるが、狭いとはいえ自分が手の届く範囲内で可能な限り改革や企画に参加した。フランス語教育を実践的なコミュニケーション中心のものへシフトしたり、自分の奥底に眠っている「ワールド」の部分（「故里」アフリカへの郷愁も含めて）を掘り返したりして、幅広い視点からフランス語への欲望を育むよう工夫してみた。忘れられないのは、十数人の学生を引率したフランス研修だ。アヴィニョン演劇祭でむさぼるように沢山の舞台を観劇し、それから、プルースト『失われた時を求めて』の中のマドレーヌ菓子を食べて無意志的記憶が蘇る場面で有名なレオニ叔母の家を訪問した。考えてみれば、着任した九二年はまだのんきな時代だった。そこから世界は少しずつ確実に変わっていった。いや、インターネット革命が具体化し始めると、文字通り光線のスピードで、変動が重なっていくようだった。ルワンダのジェノサイドに次ぐコンゴの二つの戦争、数々の武力紛争、9.11とテロの蔓延化、移民の億単位での膨大な増加、日本の3.11、増える一方の不平等、子供たちの未来を縛る歯止めのかからない温暖化…。私の二十九年間の駒場時代は激動の時代とともにあったが、それに完全な終止符を打つかのような現在のパンデミック。どう考えても、The time is out of jointだ。

こういった世界の現状に応えるような教育を行ってきたのか、とつぶやく声が聞こえてならない。勿論反省することしきりだが、この二十九年間を経て、教えることが何なのかということがようやく少し見えてきた気がしている。それは多くの駒場の学生との対話によって少しずつ学んだことである。学生のみなさん、至らないことが多かったかもしれませんが、本当にありがとう。そして、長らく、役職などにおける私の無能を許し、想像しうる以上にいつも寛大に、やさしく見守ってくださったフランス語部会と表象文化論の先生方に、言葉では言い尽くせない筈だが、一番自然に私の口から出るMERCI！をお伝えしたい。また、どこかで、お会いしたいと思います。視野を更に広げるために、遠くへと飛ぶかも知れません。たとえば、コマバからバマコへと。

（超域文化科学／フランス語・イタリア語）

送る言葉

粋人を送る

河合祥一郎

「粋」という言葉が彼ほど似合う男もいない。オートバイを乗りこなし、常に颯爽としていて恰好いいこの人にも定年という時がやってくるとは俄かに信じがたい。

古典演劇から現代の舞台芸術一般まで広く通じ、とりわけダンス、舞踏の専門家であるパトリック・ドゥヴォス先生とは、同じ演劇畑ということで本当に長いお付き合いをさせて頂いた。大学内で会うより劇場などで会うことのほうが多かったかもしれない。最近では、二〇一九年、太陽劇団主宰の演出家アリアーヌ・ムヌーシュキンが京都賞を受賞したが、選考過程やムヌーシュキン来日にあたってのドゥヴォス先生の活躍ぶりが特に印象に残っている。それこそ誰にも真似できない尽力をなさっており、そんな一例をとっても演劇の分野で日本と世界とを結ぶ大きな貢献をし続けてきた先生の力の大きさを痛感する。

二〇〇一年に太陽劇団が来日して文楽の手法を用いて『堤防の上の鼓手』（新国立劇場）を上演したとき、私が公演に対して批判的な意見を言うと、ドゥヴォス先生が意外そうな顔をなさって二人で少し議論をしたのもよい思い出だ。

先生は、大江健三郎、谷崎潤一郎、井上ひさし、野坂昭如などの日本文学の翻訳にも尽力なさって、村上春樹の『羊をめぐる冒険』のフランス語訳では第二回野間文芸翻訳賞を受賞した。村上春樹の世界的評価の高さの背景にはこうした優れた翻訳があることは言うまでもない

日本人なのかと思うほど日本語に堪能で、複数の文化をまたいで高度な演劇論・文化論を論じることのできるベルギー人教員が東大からいなくなるのは、本学にとって実に大きな損失だ（先生は、大学院入試の際に日本語で書かれた論述問題や論文を読むのに苦労をなさっており、逆に言うと、そうした苦労を人一倍なさりながら大学に貢献してくださったことに今更ながら頭が下がる）。

歌舞伎にも造詣が深く、パリのオペラ座で歌舞伎が上演されればフランス語字幕を担当するといった活躍もなさってきたが、たぶん一番のご専門は舞踏であり、土方巽や大野一雄の研究では大きな貢献を成していらした。そして二〇二〇年には、ついに大野一雄論で博士号を取得した教え子が出て、後継者育成も名実ともに成って誠にめでたい仕儀となった。私もこの博論審査に参加させていただいたが、この博論が先生の指導の賜物であったことを確信した。

退官後はどうなさるのか予定を伺っていないが、先生のことだから、これまでどおり軽やかなステップで欧州と日本とを行き来して、研究や鑑賞を続けられるのだろう。私もぜひ見習いたいと思う。少し長くフランスに滞在したら、彼のように粋を身に着けられるようになるだろうか。

（超域文化科学／英語）

■ 2020年度退職教員の最終講義ご案内

松尾　基之　教授（広域科学専攻広域システム科学系）
「物質の化学状態から環境を見る！」
日時：2021年3月12日（金）　13：00　　オンライン配信
問合せ先：教養学部化学部会秘書　吉田知雅子
メール：cgyoshid@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

村田　昌之　教授（広域科学専攻生命環境科学系）
「『繋ぐ』ことで見る、識る、創る」
日時：2021年3月12日（金）　13：00　　オンライン配信
問合せ先：教養学部化学部会秘書　吉田知雅子
メール：cgyoshid@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

※オンライン配信のURLについては教養学部報HPでご案内いたします。

2021/1/7時点での内容です。講義内容等が変更になる場合がございます。
最新情報は教養学部のウェブサイトでご確認ください。
https://www.c.u-tokyo.ac.jp/index.html

駒場をあとに

教えられ導かれて二十九年

安岡治子

ここ一、二年、定年とは、人生の終末を迎える時の予行演習のようなものかもしれないと思うようになった。人生の終末に来し方を振り返ることができるとしたら、私は聖書の「タラントンの喩え」のように、天から預かった僅かなタラントンを生涯何の努力もせずに全く増やすことができず、「怠け者の悪い僕だ」と主から叱責されるに違いない。

二十九年間勤めた駒場を去る今、同じような叱責の声は痛いほど感じるのだが、同時に、この駒場の環境に置かれたからこそ、乏しいタラントンをほんの僅かながら増やすことができたのかもしれないとも思う。

私が駒場に赴任したのは一九九二年、長かった昭和も終わり、ソ連邦が崩壊した直後のことだ。当時の駒場のロシア語部会は七人ものメンバーがいた。その後すぐに大学院の重点化があり、私は地域文化研究専攻に所属することになった。駒場の中でもこの二つの組織に入れてもらえたことは、私にとって大きな幸せであった。

駒場に来るまで私は、ロシア革命後の新しい時代に応えるように一九二〇年代から三〇年代に様々な文体やテーマで小説を書いたゾーシチェンコやプラトーノフなどの作家、また一九七〇年代に「農村派」と呼ばれた作家の一人ラスプーチン（帝政末期の怪僧ではない）の小説を研究対象としていた。

一九九一年の暮れにソ連邦のまさかの崩壊があり、二十世紀ロシア文学史は根本的な見直しを迫られた。現存の作家たちも、ロシアが今後進むべき方向について、一九世紀のスラヴ派と西欧派以来の論争に参加せざるを得なかった者もいる。（ラスプーチンもその一人である。）さらにソヴィエト時代には禁書扱いで長らくソ連国内では研究が進まなかったキリスト教思想関係の図書も大幅な復刻が進んだ。

こうしたロシア本国の環境変化と共に、私が地域文化研究専攻に配属されたことも、その後の私のささやかな研究の道に少なからぬ影響を与えたと思う。文学作品のテクスト分析において、その背景にある歴史、宗教、思想、民族、芸術など、つまりはロシア地域文化についてそれまでより深く考えるようになったからである。

ロシアは、十九世紀末から二十世紀前半にかけて、キリスト教思想の復活の時期を迎えたのだが、その思想家の中には数学者にして二十世紀に天動説を支持したフロレンスキーや今まで生きた全ての祖先の復活を考えたフョードロフなどもいた。フョードロフは、キリスト教の「肉体の復活を信じます」というクレドの大真面目な実現を考えた思想家だが、彼の考えた「復活事業」とは、弱肉強食の原理を打ち砕く、自然と身体の変容を目指すものだった。この一見荒唐無稽な思想は、死と復活の意味を問う『カラマーゾフの兄弟』を書いたドストエフスキーにも、不和反目のない兄弟愛に満ちた世界の到来を夢見たプロレタリア作家のプラトーノフにも強烈なインスピレーションを与えたと言われている。

私はこのフョードロフの思想や、ドストエフスキーと東方キリスト教、また一九二〇年代の亡命思想家たちが考えたユーラシア主義について、そしてこれら全ての根幹にあるロシア独特のリーチノスチ（人格・個性）の概念について、ここ三十年近く考察してきたと言える。

駒場では、極めて聡明な同僚たちと学生たちに恵まれた。日常的なこれらの人々とのコミュニケーション無くしては、私のささやかな研究は一歩も前へ進まなかっただろう。同僚たちはもとより遥かに仰ぎ見る名峰であったが、駒場を飛び立ち日本各地のみならず世界にも羽搏いて行ったかつての学生たちも、いまや私が教えを請う存在である。

駒場での勤めも、なんとか大過なく終えられそうかと思っていた矢先、忽然として湧き起こったコロナ禍によって、授業も会議も試験までもがオンライン化するという事態に立ち至った。こんなことが無くとも、事務の方々には日頃から大変なお世話になって、どうにか今まで駒場で生き延びてきたのだが、今年度の大変動の中で、同僚の先生方や事務の方々の計り知れぬ友愛、途轍もない忍耐強さに、私はあらためてしみじみと感謝した。

オンライン化を推進した超有能なるT先生は、ある会議で「駒場の全教員を一人も取り零すことなくオンライン化に導かなければならない。私は、同僚の女性で眼も悪く来年定年を迎える先生にもわかるようなオンライン・ガイドを書きます」と述べられた由。緑内障を患い、全くの機械音痴の私を念頭に置いた発言である。まさに一人残らず全員の救済・復活を目指したフョードロフの精神ではないか。そのお言葉どおり、懇切丁寧に書かれたガイド書類のおかげで、私のような者でさえも、何とかオンライン化の波に乗ることができた。優秀な駒場スタッフは、偉大なる教育者でもあるのだ。

皆さま、ほんとうにありがとうございました。心より御礼申し上げます。

（地域文化研究／ロシア語）

送る言葉

安岡先生を送る言葉
―ロシア語部会の灯としての顔

渡邊日日

安岡先生のお名前に筆者が初めて接したのは三〇年ほど前のことだ。学部生の頃に読んだ小説の訳者としての〈安岡治子〉である。ロシア文学・ロシア語・ロシア音楽への関心からロシア語を選択、群像社の「現代のロシア文学」シリーズにあるラスプーチンの『マリヤのための金』（一九八四年）を手にしたのだった。ラスプーチンはシベリアのイルクーツクに生まれた作家で、アスターフィエフらとともに二〇世紀後半のシベリア文学を担う人物だが、当時の筆者はシベリアの文化人類学者になろうとは思っておらず、もちろん、そのあと駒場での苦労をともにする〈同志〉のお仕事とは想像しようもなかった。

安岡先生のお顔は複数ある。ロシア文学と思想・宗教（ユートピア、メシアニズム、東方正教など）との相関性の研究者の顔。ラスプーチンやドストエフスキーの翻訳家としての顔。ロシア語教育者の顔。ここでは、ロシア語部会の一員としての姿とも重なるゆえ、最後の顔について触れたい。

ロシア語学習書は数多く出版されるようになっているが、実際に〈使える〉もの、つまり一定以上の範囲の文法を網羅して示し、高度な読解のときにも参照できるものは少ない。そのなかで、二〇一一年に研究社より出された先生の『総合ロシア語入門』は最高峰と言って良い。昨年度、定年退職されたゴルボフスカヤ先生との共著、『基礎から学ぶロシア語発音』（二〇一六年、研究社）とともに、学習者の長い道のりを明るく照らしてくれる。この二冊は、安岡先生が最上クラスのロシア語教師であったことの何よりの証左である。

実務の面でも光を照らしていただいた。その例の一つとして、部会と地域・ロシア東欧コースとの〈橋渡し〉がある（両者の関係が悪いということではありません！）。部会のメンバーの所属先が超域や言語といったようにバラバラで、時間割のすり合わせなど気苦労が絶えなかったのでは、と想像する。

部会のなかでも複数の顔をお持ちだった。一方で〈配慮〉の先生。様々な形で気配りをしていただいたが、〈安岡ラベル〉（お名前と綺麗な花模様が印刷された小さなシール）が貼られた葡萄酒は部会のなかで、ときには部会を越えて、種々の相互作用を動かす一種の〈通貨〉となっていた。部会は今後、通貨なき世界に逆行するのだろう。他方で〈せっかち〉な先生。急に電話がかかってきて、「メール読んだ？」で始まる早口の発話を耳にするのも日常だった（一、二時間前に発信されたメール…少し時間をください）。授業の進み方も早く、学生たちは、某社の語学参考書の題名をもじって「エクスプレス安岡」と愛称をつけていたはずである。

約二十年、同僚として、駒場という「…な」（最適な形容詞を補ってください）労働環境のみならず、〈少数部会の幸いと悲哀〉をもともに味わってきた先生が退職されるのは信じがたいことである。いろいろとモラル・サポートを受けた者として今後途方に暮れそうなのであるが、大きな声で、「安岡先生、お疲れ様でした！」。

（超域文化科学／ロシア語）

本の棚

高橋英海

田中創 著『ローマ史再考 なぜ「首都」コンスタンティノープルが生まれたのか』

（NHKブックス、二〇二〇年）

提供　NHKブックス

覚えておられる方はそう多くはないかもしれない。二〇一三年に、今年もしかすると開催されるかもしれないオリンピックの候補地が決まったとき、東京のもっとも有力なライバルだったのはイスタンブールである。私としてはぜひイスタンブールが選ばれてほしいと願っていた。世界的に見てもっとも魅力的な主要都市の一つだからである。かつてコンスタンティノープルと呼ばれたこの都市の魅力は、ボスポラス海峡を隔てアジア大陸を望むその立地が生み出す美しい景観とともに、東ローマ・ビザンツ帝国、オスマン帝国という、アジアとヨーロッパの二大陸にまたがる二つの帝国の都として君臨した一六〇〇年の年月の間に蓄積した膨大な歴史的、文化的遺産にある。

田中氏の『ローマ史再考』はそのコンスタンティノープルの都としての「幼年期」、より具体的には都となる前段階としての三世紀からユスティニアヌス帝（五二七～五六七年）の時代までを扱う。ここで、副題にある「なぜ『首都』コンスタンティノープルが生まれたのか」という問いについて、三三〇年にコンスタンティヌス大帝が「遷都」したからという教科書的な答えが不十分なものであることは言うまでもない。本書はローマ帝国の歴史のなかでコンスタンティノープルが二世紀あまりの時をかけてローマに代わる新たな首都としての地位を確立していった経緯を詳細に解き明かしてくれる。

三世紀の「軍人皇帝」の時代以降、歴代のローマ皇帝は帝国の広大な領土を維持するためにローマを離れて移動することを余儀なくされ、さらにディオクレティアヌス帝（二八四～三〇五年）の治世以降には複数の皇帝が並立したことにより、帝国の政治的中心地は各地に分散した。本書前半の三章（「コンスタンティノープル建都」、「元老院の拡大」、「移動する軍人皇帝の終焉」）では、そのような状況のなかで、コンスタンティヌス大帝とその一族の支配下において、大帝が築いた都市が帝国東部のエリート層が集まる場となり、帝国の新たなに中心となっていった経緯が語られる。後半の三章では、このようにして帝国の政治の中心地となったコンスタンティノープルがその地位をさらに確固たるものとしていった過程が記される。なかでも、

3面へ

駒場をあとに

駒場キャンパスと自然環境

伊藤元己

駒場に着任したのは平成十二年（二〇〇〇年）四月であり、もう二十年以上も前の事です。いつの間にそんなに時間が経ったのかと思うほど、あっという間でした。学部前期課程、後期課程、大学院という駒場特有の三層構造に加え、理学系研究科の兼担や学会業務など、講義や会議にとられる時間が多く、特に教授に昇進してからはその割合が増えて大変でした。それでも、研究を進めるために海外調査にはほぼ毎年出かけることができていて、周りにご迷惑をおかけしていたことと思います。

私の専門分野が多様性生物学であることもあり、駒場キャンパスの植物相や昆虫相の調査を野外実習として学生や研究室メンバーと調査をしてきました。これらの調査で採集した標本は、私が駒場自然科学博物館館長でもあることから、駒場博物館に収めてあります。調査の結果、駒場キャンパスは23区内においては結構生物多様性の高い場所である事がわかってきました。これは、近隣に駒場野公園や駒場公園といった比較的広い森林があると共に、駒場の諸先輩方から引き継がれている駒場の緑を大切にする姿勢のおかげだと思います。この十年ほどはキャンパス内の木々の痛みが目立ってきており、桜の老木化や台風などでの倒木が深刻です。まだまだ手を入れないといけないことが多く残っているのに定年で駒場キャンパスを離れないといけないのが心残りです。

駒場キャンパスが自然豊かな一例としてカメムシの新種のお話をいたします。私は植物が専門ですが、Global Biodiversity Information Facility（GBIF）の日本ノードの仕事として日本の生物情報を収集して発信するというプロジェクトに携わっている事から、長期に渡り昆虫分類学者に博士研究員（ポスドク）として働いてもらっていました。歴代のポスドクに、東京大学のキャンパスから新種を発見して論文として発表して欲しいとお願いしたのですが、なかなか実現しませんでした。実は、小型の昆虫や無脊椎動物は、駒場のような都会でもまだまだ未記載種が結構いるのです。蛾類や甲虫類を専門としているポスドク達は、「やろうと思えば新種は見つかるだろうけど面倒くさい」と思っていたようですが、しばらくしてカメムシ類を専門としているポスドクが二〇一三年についに願いを叶えてくれました。エドクロツヤチビカスミカメという名前が付けられたカメムシで、発見場所はなんと3号館の私の研究室の目の前に植わっているアカメガシワからです。学名は駒場にちなんでSejanus komabanusと命名されました。駒場キャンパスのカメムシ相はほぼ完璧に調査が終わり、全部で一一四種が見つかりました。これは明治神宮の種数を上回り、皇居の一二七種に迫る数です。このことからも駒場キャンパスが良好な自然環境を保っている事がわかります。

定年まで後一年半となり、研究面でも一区切りつけるのにがんばろうとしていた矢先、一昨年の十月に急性心筋梗塞で倒れ、三月末まで五ヶ月ほど大学を休むことになってしまいました。おりしもコロナ渦で感染者数が増加して緊急事態宣言がだされる事態になり、結果、一年ほぼほとんど何もできない状況になってしまいました。まだ体力的にも元には戻っていないので、今は残りの時間はあまり焦らずにやろうと思っているところです。駒場の先生方は多忙なので過労気味の方が多く、私だけでなく周りにも脳梗塞や心筋梗塞などで倒れられた先生が結構居ますので、自分の体をお気遣いながら駒場の発展にご尽力下さい。

（広域システム科学／生物）

送る言葉

駒場を去る伊藤先生からのメッセージ

吉田丈人

伊藤先生、二十年以上に渡る駒場でのお勤め、大変お疲れさまでした。ご退職、おめでとうございます。一昨年の秋に倒れられた時には大変心配しましたが、退院されて回復に向かわれる姿を拝見したときは、とても安堵しました。ご家族・ご親族の皆様や伊藤研究室のメンバーはじめ多くの学内関係者だけでなく、代表をされている研究プロジェクトや役員を務められている学会など多くの関係者が、同じ気持ちだったと思います。思い起こせば、たいへん疲れたご様子を拝見したことは、これまで何度もありました。退職を間近にしてそれが大事に至ることになるのは、もしかしたら予見できていたのかもしれません。持続可能な働き方を忘れていないかと、私たちに身を持って教えてくださったように思います。駒場は忙しい職場です。しかし、忙しさが限度を超えて健康や生活に影響するようでは、駒場の将来を担ってくれる人はいなくなります。現役を続ける私には、健康で心豊かな生活を送りつつ駒場の仕事に取り組むことが必要だと、きわめて当たり前に聞こえることの大事さを、改めて考えさせられる出来事でした。

伊藤先生の研究は、もともと専門にされていた植物の系統学・分類学に始まり、昆虫などの動物も含めた多様な生物群の進化学・生態学に発展してきました。生物多様性情報学という近年急速に発展している分野の日本における第一人者とも言えます。数多くの研究業績を紹介することはここではできませんが、生物多様性情報学の発展に貢献されるとともに、多くの優秀な人材を育てられたことに、大きな敬意を表したく思います。その一方で、この紙面に書かれているように、多くの人々が気づかないような小さな虫にも、温かい眼差しを向けてこられました。名前がまだない虫に新しく名前をつけるということは、その虫が地球の生物多様性を構成する一員として広く認識されるということです。生物多様性の危機が叫ばれはじめてからずいぶんと時間が経ちますが、生物多様性の損失は一向に止まることがなく、悪化の一途を進んでいます。二〇二一年は、二〇一〇年に日本での締約国会議で合意された生物多様性条約の世界目標が十分に達成できなかったことを受け、二〇三〇年に向けての新しい世界目標の合意が予定されています（コロナ禍のため二〇二〇年から予定が遅れています）。新しい世界目標が今度こそ達成されるためには、広く社会全体の転換が必要になると言われています。そのとき、名もない小さな虫に向ける眼差しが大事だと、伊藤先生がこの紙面に書かれた記事は、静かに私たちに訴えています。退職はされてもご自分の研究を続けていかれると思いますが、どうぞお元気でいてください。

（広域システム科学／生物）

2面より

第四章「儀礼の舞台」に見られる、コンスタンティノープルが皇帝による政治の演出をするための舞台装置として発展したという指摘には特に肯かされた。五世紀はローマ帝国内でキリスト教がその勢力を急速に拡大させていった時代でもある。五世紀後半を扱う第五章「合意形成の場としての都」では、コンスタンティノープルが政治的、宗教的な合意形成の場として機能したことが示され、このことが「西ローマ」が滅びたのちも「東ローマ」が長く存続した理由として指摘される。最終章の「都の歴史を奪って」では、ユスティニアヌス帝によるローマ法の再編や帝国西部の再征服などをとおしてコンスタンティノープルが旧都ローマに代わる首都としての地位を最終的に不動のものとしたことが示される。

本書は首都コンスタンティノープルをめぐる出来事を中心的に扱いながらも、四世紀以降のローマ帝国全体の歴史についても多くの重要な示唆を含む。古代ギリシア・ローマの歴史や文学・文化の研究のなかでかつてはややもすると継子扱いされていた「古代末期」と称される時代の研究が世界的に盛んになったのはもう数十年前のことだが、国内のローマ史研究ではこの時代を扱う書物はいまだにそう多くはない。そのようななかで、世界的に見ても重要な新たな分析を含む田中氏の研究書は画期的であり、今後、田中氏が国内でのこの分野の研究を牽引していくことが期待される。本書の「あとがき」では七世紀のローマ帝国とササン朝ペルシアの弱体化がイスラーム勢力の急速な拡大を許したことが指摘されているが、さらに欲を言うならば、田中氏のユスティニアヌス帝期以降の研究にも期待したい。

（地域文化研究／英語）

■ 2019年度退職教員の最終講義ご案内

増田　茂　名誉教授
（広域科学専攻相関基礎科学系）

「電子分光と表面化学」

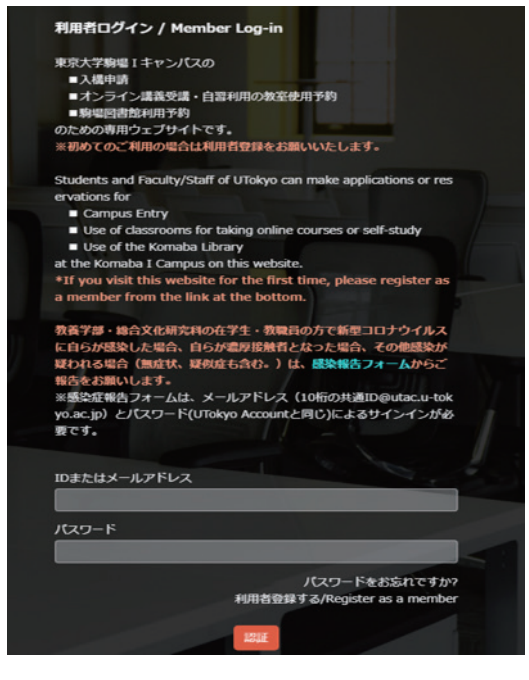
日時：2021年3月12日（金）
13：00　オンライン配信
問合せ先：教養学部化学部会秘書　吉田知雅子
メール：cgyoshid@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp
※オンライン配信のURLについては教養学部報HPでご案内いたします。

2021/1/7時点での内容です。講義内容等が変更になる場合がございます。
最新情報は教養学部のウェブサイトでご確認ください。
https://www.c.u-tokyo.ac.jp/index.html

～学生・教職員のみなさまへ～　駒場Ⅰキャンパスへの入構について

コロナウイルス感染拡大を防止する観点から、現在、駒場Ⅰキャンパスでは関係者以外の入構は原則として認めない取扱いとし、正門以外の各門は閉鎖しています。正門から入構の際には「東大駒場Ⅰキャンパス入構／施設利用申請サイト」からの申請を忘れずお願いします。そして、申請完了後の返信メッセージ画面と学生証・職員証等の身分証明書をあわせて守衛室へ提示してください。

＜東大駒場Ⅰキャンパス入構／施設利用申請サイト＞
https://select-type.com/rsv/?id=kDRuRchp5I4
■入構申請
■オンライン講義受講・自習利用の教室使用予約
■駒場図書館利用予約



引き続き、コロナウイルスによる活動制限への対応についてご理解ご協力いただけますようお願いいたします。

駒場をあとに

「繋ぐ」ことで見る、識る、創る

村田昌之

東大・駒場の教養学部へ転任が決まったことが電話で知らされたのは、十月中旬のある晴れた昼時だった。私は、愛知県岡崎市にある（当時の）岡崎国立共同研究機構・生理学研究所の一階の広い居室で一人昼食を取ろうとしていた。「東京行き」には期待もあったが不安も大きかった。京大・理学部・生物物理学教室で身に付いた個人ベースで、職住近接で時間を無視した研究環境に支えられたサイエンスは、岡崎に移って少しは改善されたものの、それが東大・駒場の真面目な風土（そう信じていた）で通じないだろうことは、世間知らずの私でも簡単に予想ができた。また不得手なことをすることになる、と思った。

最新の生命科学は、ヘテロさとの勝負である。生命科学で汎用される技術である生化学は、細胞集団をごっそり取ってきて細胞構造を破壊して得られる抽出液をもとに、そのヘテロ性を無視しながら網羅的で定量的な「平均化された」分子情報を得る。しかし、細胞構造の破壊を伴う生化学的解析は分子情報として重要な「局在という形態情報」を損なうことになる。一方、タンパク質の機能に重要な形態情報を単一細胞レベルで抽出できるのが細胞生物学である。そこでは、細胞形態や構造を保持した形で光学顕微鏡システムを武器に、ヘテロな細胞集団内の特定の細胞のタンパク質の「量、質、局在」情報を抽出できる。生化学や分子生物学から得られた膨大な分子情報を、細胞生物学が得意とする形態情報と「繋げる」ことで、次々と生まれてくる生命科学の諸問題に汎用的に対処できる新しい解析法がつくれるのではないか。こんな無謀なミッションを掲げて、具体的戦略も持たないまま東大の教授生活をスタートさせた。

この無謀さを支えていたのは、前任地である生理学研究所で私のグループが構築した「セミインタクト細胞解析法」であった。これは、細胞膜をタンパク質毒素で透過性にして細胞質を流出させ、代わりに他の細胞や組織から調製した「細胞質」で置き換える技術である。セミインタクト細胞系をデジタルイメージング技術とカップルさせることで、単一細胞内で生起するオルガネラ形態や分子の局在変化（形態情報）とそれを制御する化学反応（分子情報）を定量化できる。これが、形態情報と分子情報を「繋ぐ」ための私の構築した最初の解析法だった。この解析法は「リシール細胞技術」に深化して、創薬分野に「病態モデル細胞」を提供している。

予想もしなかったが、形態と分子情報を「繋ぐ」プロジェクト推進は、創薬・細胞医薬分野における社会的要請が強い後押しとなった。生命現象や疾患の原因となる分子機序を解明するには、遺伝子やタンパク質の「量」的変化だけでなく、単一細胞内の「局在や修飾状態」変化の定量化の重要性が認識され始めたのである。社会的要請は、技術や知識だけでなくそれを使う人たちを一気に突き動かす。細胞染色画像の「定量化された形態と分子情報」を、世界初の「共変動ネットワーク」として「繋いだ」のは、生物学、数理統計学、制御工学、バイオインフォマティクスなどの多彩なバックグラウンドを持つ多くの研究者や技術者達である。そこでは私の研究室メンバー（野口誉之助教、加納ふみ前助教（現：東工大・准教授）、院生・特任助教や技術補佐員）と企業（光学顕微鏡メーカーや創薬企業）の研究員が、異なる価値観をぶつけ合う様子を見たし、そこで発する熱がじわりじわりと物事を進める経験もしたし、そこでは、細胞生物学研究所の一階の広い居室で一人昼食を取ろうとしていた。「東京行き」には期待もあったが不安も大きかった。京大・理学部・生物物理学教室で身に付いた個人ベースで、職住近接で時間を無視した研究環境に支えられたサイエンスは、岡崎に移って少しは改善されたものの、それが東大・駒場の真面目な風土（そう信じていた）で通じないだろうことは、世間知らずの私でも簡単に予想ができた。また不得手なことをすることになる、と思った。

最新の生命科学は、ヘテロさとの勝負である。生命科学で汎用される技術である生化学は、細胞集団をごっそり取ってきて細胞構造を破壊して得られる抽出液をもとに、そのヘテロ性を無視しながら網羅的で定量的な「平均化された」分子情報を得る。しかし、細胞構造の破壊を伴う生化学的解析は分子情報として重要な「局在という形態情報」を損なうことになる。一方、タンパク質の機能に重要な形態情報を単一細胞レベルで抽出できるのが細胞生物学である。そこでは、細胞形態や構造を保持した形で光学顕微鏡システムを武器に、ヘテロな細胞集団内の特定の細胞のタンパク質の「量、質、局在」情報を抽出できる。生化学や分子生物学から得られた膨大な分子情報を、細胞生物学が得意とする形態情報と「繋げる」ことで、次々と生まれてくる生命科学の諸問題に汎用的に対処できる新しい解析法がつくれるのではないか。こんな無謀なミッションを掲げて、具体的戦略も持たないまま東大の教授生活をスタートさせた。

この無謀さを支えていたのは、前任地である生理学研究所で私のグループが構築した「セミインタクト細胞解析法」であった。これは、細胞膜をタンパク質毒素で透過性にして細胞質を流出させ、代わりに他の細胞や組織から調製した「細胞質」で置き換える技術である。セミインタクト細胞系をデジタルイメージング技術とカップルさせることで、単一細胞内で生起するオルガネラ形態や分子の局在変化（形態情報）とそれを制御する化学反応（分子情報）を定量化できる。これが、形態情報と分子情報を「繋ぐ」ための私の構築した最初の解析法だった。この解析法は「リシール細胞技術」に深化して、創薬分野に「病態モデル細胞」を提供している。

予想もしなかったが、形態と分子情報を「繋ぐ」プロジェクト推進は、創薬・細胞医薬分野における社会的要請が強い後押しとなった。生命現象や疾患の原因となる分子機序を解明するには、遺伝子やタンパク質の「量」的変化だけでなく、単一細胞内の「局在や修飾状態」変化の定量化の重要性が認識され始めたのである。社会的要請は、技術や知識だけでなくそれを使う人たちを一気に突き動かす。細胞染色画像の「定量化された形態と分子情報」を、世界初の「共変動ネットワーク」として「繋いだ」のは、生物学、数理統計学、制御工学、バイオインフォマティクスなどの多彩なバックグラウンドを持つ多くの研究者や技術者達である。そこでは私の研究室メンバー（野口誉之助教、加納ふみ前助教（現：東工大・准教授）、院生・特任助教や技術補佐員）と企業（光学顕微鏡メーカーや創薬企業）の研究員が、異なる価値観をぶつけ合う様子を見たし、そこで発する熱がじわりじわりと物事を進める経験もしたし、そこでは、細胞生物学研究所の一階の広い居室で一人昼食を取ろうとしていた。「東京行き」には期待もあったが不安も大きかった。京大・理学部・生物物理学教室で身に付いた個人ベースで、職住近接で時間を無視した研究環境に支えられたサイエンスは、岡崎に移って少しは改善されたものの、それが東大・駒場の真面目な風土（そう信じていた）で通じないだろうことは、世間知らずの私でも簡単に予想ができた。また不得手なことをすることになる、と思った。

最新の生命科学は、ヘテロさとの勝負である。生命科学で汎用される技術である生化学は、細胞集団をごっそり取ってきて細胞構造を破壊して得られる抽出液をもとに、そのヘテロ性を無視しながら網羅的で定量的な「平均化された」分子情報を得る。しかし、細胞構造の破壊を伴う生化学的解析は分子情報として重要な「局在という形態情報」を損なうことになる。一方、タンパク質の機能に重要な形態情報を単一細胞レベルで抽出できるのが細胞生物学である。そこでは、細胞形態や構造を保持した形で光学顕微鏡システムを武器に、ヘテロな細胞集団内の特定の細胞のタンパク質の「量、質、局在」情報を抽出できる。生化学や分子生物学から得られた膨大な分子情報を、細胞生物学が得意とする形態情報と「繋げる」ことで、次々と生まれてくる生命科学の諸問題に汎用的に対処できる新しい解析法がつくれるのではないか。こんな無謀なミッションを掲げて、具体的戦略も持たないまま東大の教授生活をスタートさせた。

この無謀さを支えていたのは、前任地である生理学研究所で私のグループが構築した「セミインタクト細胞解析法」であった。これは、細胞膜をタンパク質毒素で透過性にして細胞質を流出させ、代わりに他の細胞や組織から調製した「細胞質」で置き換える技術である。セミインタクト細胞系をデジタルイメージング技術とカップルさせることで、単一細胞内で生起するオ

送る言葉

村田先生 ありがとうございました

佐藤守俊

私が初めて村田昌之先生と会ったのは、私の駒場での採用がかかった人事面接だった。会議室に居並ぶ先生方との質疑応答が終盤に差し掛かったとき、一番後ろの席から村田先生の質問が飛んできた。その質問は当然の如く、核心を突いたものだったが、同時に、様々なアイディアが噴き出してくるような示唆に富んだものであった。駒場にこんなに素晴らしい先生がいるのかと、駒場への思いをさらに深めたことを今でも思い出す。サイエンス面での鋭さとは裏腹に、村田先生は非常に柔和で、私のような後輩にも常に丁寧に接してくださる。村田先生のファンは多い。つい先日も、村田先生の雰囲気が好きで統合自然科学科に進学したとの学生の声を聞いた。

村田先生は、京都大学の生物物理学教室で博士号を取得したのち、同教室の大西俊一先生の研究室で助手（現在の助教）としてキャリアをスタートさせた。駒場に着任するまでの間、脂質ラフトと呼ばれる細胞膜上の構造を提唱したドイツのカイ・シモンズ先生、細胞内の小胞輸送を解明したアメリカのランディ・シェックマン先生（二〇一三年ノーベル生理学・医学賞）の研究室に留学し薫陶を受けた。国内でも、月田承一郎先生、永山國昭先生、西田栄介先生、永井良三先生といった傑出した研究者と共に研究し、大隅良典先生が東京工業大学で細胞制御工学研究センターを設立した際には、細胞編集を掲げて特任教授を務めた。

村田先生といえば「セミインタクト細胞」が代名詞である。ストレプトリジンOという溶血連鎖球菌の毒素で細胞を処理すると、細胞膜に小さな孔が開く。村田先生は二〇〇〇年、この孔を通じて様々なタンパク質を細胞に入れたり細胞から出したりできることを発見した。驚くべきことに、細胞質の構成成分を丸ごと別の細胞の細胞質（例えば、病気の細胞の細胞質）の構成成分と入れ替えることも可能である。しかも、高濃度のカルシウムイオンを含む水溶液を滴下すると、細胞膜の孔をふさいで元に戻すこともできる。村田先生の革新的な技術により、生命現象や疾患のメカニズムを定量的に解析したり、従来にない薬の評価系を構築できるようになった。さらに最近では、駒場初の社会連携講座を設立して「マルチスケール解析」という新たな細胞解析技術の開発に成功している。

この原稿を書くにあたり、村田先生に色々な話を伺った。若かりし頃の思い出話から最新の研究の話まで。ただ、印象的だったのは、いま定年を迎えなくてはならないことに悔しさをにじませる言葉の数々。それもそのはず。セミインタクト細胞は、開発から二十年を経て、マルチスケール解析と共にようやく創薬支援技術として完成の域に達し、今まさに社会実装を目指した本格的な研究が始まろうとしている。しかも、村田先生の構想は創薬支援にとどまらない。新しいコンセプトの細胞医薬を開発するために、様々な技術やアイディアを持つ大学や企業の研究者を結集して、世界初の「細胞デザイン拠点」を立ち上げようとしている。いつまでも挑戦を続ける村田先生の一言一言に、背筋がピンと伸びる思いがした。

（生命環境科学／化学）

現場・出来事・比較

―駒場と『草の根の中国』の20年

田原史起

駒場で奉職してはや二〇年が過ぎた―。

一昨年、東京大学出版会から刊行された小著『草の根の中国―村落ガバナンスと資源循環』（以下『草の根』と略記）は、駒場の教員である筆者が、長期休暇のたびに行ってきた中国の村々での調査記録を基にまとめたものだ。駒場と農村の現場を往復し続けた二〇年間の一つの成果物であり、良くも悪くも等身大の自分に大きく重なる作品である。二〇年もかかってしまった」ともいえるが、授業担当や大学の業務もある中で、「二〇年でよくできたものだ、幸運だった」という思いもなくはない。自身の駒場奉職二〇周年を記念して、勝手ながらこの機会をお借りし、「現場」、「出来事」、「比較」の三つのキー・ワードから個人的な思いを述べてみたい。

まずは「現場」。フィールド・ワークを続けながら、常に筆者の頭の片隅にあったのは、「読万巻書、行万里路」（一万冊の書を読み、一万里の道を行け）という中国語の名句である。読書量もフィールド・ワークも超人的な、マッチョで精力的な研究者を目指せ、という格言にも思える。しかし、筆者の随意な解釈では、この句の要はむしろエネルギーの節約にある。農村研究に引き付けて言えば、まず先に「現場」での実践＝フィールド・ワークを始めてしまい、現場感覚を身体化したうえで理論＝文献研究に進むということである。筆者は二〇年の間に、事例となった中国の村々を「定点観測」の手法で繰り返し訪れ、農家に住み込んでは、人々と食事を共にし、あぜ道を歩き回り、オンドルの上でお喋りをしながら、中国農村に住む人々の行動ぶりを自分の身体で感じ、その生活の内在的ロジックに迫ろうとしてきた。文献による裏付けはフィールドから駒場の研究室に戻ってから、いつも「後付け」だった。いい加減なようだが、このやり方には良い面もある。一つは、「万里の道」を文献調査に先駆けて歩き始めることで、読むべき書物はおのずと絞られてくる。さらには、現場の経験によって文献資料の情報が文脈化・血肉化され、立体的に立ち上がってくることである。つまり、現場を知らないまま盲滅法に万巻の書に立ち向かう際の無駄を省くことができるのである。

日本の民俗学の始祖で農政官僚でもあった柳田国男が内閣記録課長を務めていたころ、膨大な本で埋まる書庫を整理していて思ったという。「書物で学ぼうとしたら一生あっても足りない。実地に即して調べていく方が効果がありはしないか…」。こうして「実地に即して調べる」「歩くことが学問だ」ということが柳田の確信になっていった。「現場」のもつ不思議な調律作用は、筆者も常々感じていたところである。

5面へ

送る言葉

微笑の印象
―高橋先生を送る

森元庸介

近しく謦咳に接したのでもない身がこのような一文を…といった口実をかまえるのを、高橋哲哉先生は諒とされまい。

この春、新しい大学院生を迎える場で、先生はおもむろにこう切り出された。授業や研究会での質疑にあたって、最近、若い方々の前置きが丁寧にすぎて少々もどかしい、「充実したご発表で」云々、「勉強になりました」等々…、いや、すみやかに本筋に入ってよい、最後の機会となるので、今年の授業に出席するみなさんにはとりわけ単刀直入を望みたい、と。歓迎の場に水を差すのではむろんなく、絶妙に辛みの効いたスパイスを投じるかのようで、居合わせた者のあいだでいまもふと話題になる。

誰もが知るとおり学内外でご多忙をきわめる先生だったから、ご一緒できた時間を思い起こそうとして浮かぶのは、やはり各種の論文審査の場面である。冒頭で論文の意義と射程、限界が簡潔にまとめられ、間を置くことなく、核心を衝くコメント、質問が、沈着そのものの語り口とともに、いっさいの弛みを排して連ねられる。そのあちこちでまた、圧縮された哲学史の知見が矢継ぎ早に閃いて、内心で冷や汗をかいたのは学生ばかりでなかった。

ただ、先生がまずもって自身に課されたはずの厳しさをばかり強調すれば、それは端的に誤りとなるだろう。実際、審査の場にあって先生は、微笑を絶やされることがなかった。鋭鋒をわずかでも和らげるためだったか。いや、必ずしもそうであるまい。憚らずいえば、その微笑はむしろ悪戯めいて仄かに意地悪くさえ見え、さらに、優れた成果に対してこそ、なおのことそうであったように思われる。分野や主題を問わず、精確な推論と引証、少なくともそれに向けられた努力と試行に触れると、口角は二ミリか、あるいは三ミリか、しかし瞭然と上向き、さりながら問いはいっそう鋭さを増してゆく。ためにする挑発でなく、ふりをした親密さのサインでもなく、「師」としての端然たる姿勢を保ちながら、打ち込みに確かな手応えの戻ってくることを曇りなく楽しまれるかのようだった。そのうえで、ときに「これぞ哲学の論文と堪能しました」と留保なしに破顔されることもたしかにあったのだと、ささやかな証言を書き留めておこう。

省みて、そうした往き方は、ご自身が斯界の第一人者として研究を続けられてきたフランスの哲学者ジャック・デリダのそれに通じていなかったか。「どのような点で、そう思われますか」―『遅延』を恐れぬ綿密さとともに、時の『切迫』に弛まず応答をつづけ、しかしまた、そのすべての根底に『喜び』のありうることを斥けぬ点において」。挙げるべき無数の論拠を欠いたままの、こんな扭速で陳腐な仮説を、もちろん高橋先生は諒ときまい。だが、ここが審査を離れた場であることを口実に、不出来を承知で提出する送辞として受け取ってくだされば、ただ願う。先生にもっと多くを学ぶことができていたなら――立場と主張を越え、近しく、あるいはまた遠くから、謦咳に接することのできたすべてのひとがいま分かち持ってくれるだろう、その思いとともに。

（超域文化科学／フランス語・イタリア語）

4面より

次に「出来事」。中国の行政村数は現在でも五〇万を超える。仮にその一万分の一の村を訪れるとしても、調査どころか、訪問するだけで一生かかってしまう。そこで『草の根』では、全国に散らばるたった四つの村に的を絞り、それらの村の特徴を描き出すのにも、「出来事中心のアプローチ」と呼ぶ接近法をとっている。すなわち、村落生活の何から何まで調べ尽くすというのは到底、無理だと、腹をくくってしまうのである。現地でも無理はせず、自分の知りたいことを根掘り葉掘り尋ねたりはしない。基本的には現地の人が見せてくれるもの、連れて行ってくれる場所、好んで語ってくれる思い出など、偶然かも知れないが現地で知りうる「小さな出来事」を大事にする。その結果、過去から現在の村落生活に深くかかわる農地や山林の造営、灌漑・飲水施設の整備、村営企業の設立、道路づくり、学校や教育環境の整備、定期市や宗教施設の設置、ひいては死者の埋葬に至るまで、住民が関心を持つ諸問題の解決、多種多様の小さな共同活動＝ガバナンスが見えてきた。

一つ一つの物語には、それぞれに異なる農村リーダーや住民たちが登場する。きっちりと定常的に役割を果たす組織や、固定的な財源があるわけではない。人々がその時々で利用可能な「資源」を探し出し、臨機応変に組み合わせ、循環させている様子を描けば、当該村落の特徴が何よりもビビッドに読者に伝わる。このように、「出来事」に着眼することは、実はフィールド・ワークに投入可能な限られた時間と労力を節約しつつ、地域の特徴を描く方法でもある。絵画に喩えていえば、細かいパーツを一つ一つ根気強く組み上げるモザイクではなく、できるだけ無駄な線を省きながら、短時間で対象地域をスケッチする手法に近い。

最後に「比較」。限られた個別具体的な対象をうまくスケッチするだけでは、まだ読者諸賢を納得させることは難しい。あるとき筆者の駒場の授業で『草の根』の村々の事例について語っていたところ、受講学生から「こんな細々とした村の研究に将来性はあるのか？」という趣旨のコメントをもらった。『草の根』第三章から第六章の四事例だけを読めばそのような感想は免れ得ないかもしれない。そこで、村々の小さな物語を、ただそれだけものに終わらせず、中国社会論としての理論的な含意を引き出すために不可欠だったのが、「比較」を通じた概念化であった。

『草の根』の研究対象地域は大きく見れば「中国」であるが、より細かく見れば山東省、江西省、貴州省、甘粛省というそれぞれに個性的なサブ地域に位置する村々である。それぞれの地域事情に詳しい「現地通」は多いが、複数の地域を正面から比較するような試みは中国内外を含め、存外に少ない。本書では、第二章で提示しておいたフレーム・ワークに基づき、国内の四地域の村落間の比較（第七章）を行うことによりそれぞれの個性を浮き彫りにするとともに、中国の村落ガバナンスの一般的特徴を「資源循環モデル」として提出した。さらに中国農村の全体的特徴を、ロシア農村やインド農村との潜在的比較（終章）を通じて再提示した。大雑把な話となるのは承知の上だが、職人気質の地域研究者であるほど避けて通りがちな、恥知らずな（？）比較」を通じて、一国主義的な中国研究ではなかなか意識されることのない中国社会の特徴の一端を示せたのではないかと思う。

以上のごとく駒場と現場を二〇年にわたり循環しつつ育まれた『草の根の中国』に、昨秋、第三三回アジア太平洋賞（大賞）と第一〇回地域研究コンソーシアム賞（研究作品賞）という二つの賞が授与された。本書の執筆動機の一つには、これまで継続的に科研費の申請が採択され、中国・ロシア・インドでの農村調査を続けられたことに対する日本社会への「恩返し」の意味もあった。受賞により光が当たることで、本書が我が国の知的共有財産の一部として認知され、将来にわたりより多くの読者に出会っていくことを期待している。

（地域文化研究／中国語）

駒場をあとに

コロナと共に、過ぎ去った日常

岩本通弥

およそ一年前だったら、記憶に残った駒場の日常を語ったに違いない。授業の想い出や学生・院生たちのこと、研究室・部会や実習のこと、あるいは新任の時に振り当てられた学生委員と重なった駒場寮廃寮問題や、委員長だったことから任せられた八号館図書館を、各部局図書室とともに新営の駒場図書館に統合・移管した業務、さらには晩秋の、銀杏の実を踏み割る音の響きやそうした春夏秋冬の季節感などが、私の中に等分に並列していたように思われる。一九九五年に赴任して駒場で累積したそうした日々の生活の総和より、この一年で経験した新型コロナウィルスによってもたらされた「新しい日常」の方が、今の私の頭の中を隙間なく埋め尽くしてしまっている。それ以前の記憶を思い出そうとしても、コロナが大きく立ちはだかり、うまく想起できないでいるのだ。

対面授業が禁じられ、急遽、馴れないオンライン授業に切り替わるときに覚えたIT弱者の鬱憂な不安感と、コロナそのものへの得も言われぬ恐怖心、その悪感情を振り払うように集中した、講義資料の準備に追われた日々の連続に、一年早く定年を迎えていたら、こんな苦労をせずとも済んだのにとか、わずか一年のために、何でこんな新しいIT操作を一から勉強しないとならないのかと（マニュアルを読んでも用語の意味がわからない）、そういった不平や焦りを胸のうちに固く深く押し込めながら、必死に、その作業に黙々と費やすだけの毎日が繰り返された。次の講義時間があっという間に迫ってきて、休む暇もなく、丸でジェットコースターにでも乗っているかような、体感スピードだけは異様に早い時間の経過感を味わいつつ、七月の学期末には疲労困憊は極限に達していた。

もちろん同じ思いをしたのは、私だけではない。否、入学式も中止となり、登校も叶わなかった特に新入生は、オンラインの連続や課題レポートの多さから、より深刻な艱難辛苦に見舞われたことに同情を禁じ得ない。日本中が、世界中が同じ切迫感の下、異常な緊張感に囚われて、憔悴していたはずであったのに、どこにも出かけられない夏を越える頃となると、漸次、それに慣れ切ってゆく自分を含めた私たち＝世間に、憤懣やるかたない鬱屈した苛立ちが沸々と込み上げてきたのは、何とも不思議な感覚だった。

雑用のため、Aセメスターになると、月に二回ほど研究室に出向くとき、約一時間の通勤時間が、何ともじれったく、実に長く感じるようになっていた。在宅でラフな格好でも構わない、オンライン授業の便利さが心底染み込んでしまった身体には、もう対面授業のために出勤することは、それも満員電車の中に我が身を置くことなぞ、嫌悪感の方が先立ってしまっている。いやはや人間の環境への適応は、実におそろしい。

私の専門とする民俗学は、「普通の人びと」の当たり前だとされる日常や、当然視されてゆく日常化のプロセスを問う学問に転換して、はや四半世紀以上経っている。「普通の人びと」の経験した、このコロナ禍のような出来事が、いかに日常化してゆくのかを、「小さな人びと」の立場から捉える学問に、「伝承」の科学から「伝達」を扱う科学へと変貌している。怪獣アマビエを追跡するだけが民俗学者の仕事ではない。

チェルノブイリの原発事故によってドイツの日常が、どう変わったのか、その詳細が追究されて以来、「普通の人びと」もしくは例えば環境保護団体が、専門家などから発せられた情報の、何を摂り入れ、何を拒み、いかに自らの生活を変えていったのか、いかに運動に反映させたのか、マスメディアやSNS、口コミなどを介して、あるいはそれらを駆使して、どのように情報を得て、いかなる判断に及び、どんな文化的観念が表明され、利用・消費されてゆくのか、そうした「伝達」のプロセスを把捉する学問となっている。

今回の日本の反応で特に興味深かったのは、当初専門家が否定したマスクの着用をめぐる諸現象であった。未だアメリカやドイツではマスクに関する反対のデモが起こるのに対し、私たち日本人は最初の頃、感染症の専門家がマスクをしても極小のウィルスには意味がないと繰り返したにも拘らず、ほとんどの者がそれをし続けてきた。途中から感染者の側が人に広げないための最大の予防策だと言い換えられたが、他人に迷惑を掛けてはならないとする規範意識からなのか、マスクをしていないと白眼視される世間の目を惧れての行為だったのか。両者を含んでいようが、いずれにせよ日本特有の迷惑規範が作用したことは容易に想像される。迷い戸惑うという原義を持つ迷惑が、時間の厳守とともに公共の規範に化けるのは、第一次世界大戦後の民力涵養運動・生活改善運動からである。

駒場には二六年間お世話になった。いや最後の十年は病気の連続で、同僚には迷惑を掛け続けたというべきか。どうもありがとう。

（超域文化科学／歴史学）

送る言葉

岩本通弥先生を送る

箭内　匡

民俗学と文化人類学を家族に擬えれば、子供の頃は一緒に仲良く遊んだけれど、成人してそれぞれが自分の道を進むうちに、いつしかすれ違いが生じてしまった兄弟に似ている。遠くからみると確かに兄弟なのだが、肌を接して付き合うとむしろズレが目立ってくる。

とはいえ、このズレが特に目立ってきたのは比較的最近で、ちょうど岩本先生が駒場に着任された一九九〇年代のことかもしれない。民俗学と文化人類学は、記号論・象徴論が流行った一九八〇年代には世間の注目を浴びたが、冷戦終結からグローバル化へと進んだ一九九〇年代には共に深刻な学問的危機を経験した。文化人類学はもともと海外の研究者との交流が密だったため、特に英語圏の研究動向に大きな影響を受けるようになる。それとは対照的に、あくまでも日本をベースとする民俗学は、自らの学問的伝統を根底から見つめ直す中で再生を図ったように思われる。

岩本先生のお仕事は、そうした民俗学の学問的再構築という作業に真正面から向き合い、そこから新地平を切り開く大きな作業であったように思われる。柳田國男を正しく読むというより、柳田のアクチュアリティーを新しい形で見定めつつ、そこから新しい民俗学を構想すること。先生はそれを「日常」についての徹底的な問いとして論じられ、そしてその問いを、文化人類学者のように一般的な理論的枠組に照らして考えるのではなく、歴史的観点から考えたり、韓国のケースと比較したり、つまり時間・空間的に隣り合わせのものとの対比の中で考察された。先生のお仕事で特に目につくのは、国内および海外（韓国・中国・ドイツなど）の多数の研究者との精力的な共同研究であり、その多大な成果は多くの編著書や学術雑誌『日常と文化』に見ることができる。もちろん岩本先生は優れた教育者でもあり、多くの学生が文化人類学コースで先生の指導を仰ぎ、そして研究者となって巣立っていった。

それでも、文化人類学と民俗学の間のズレが存在する中で、色々とお悩みになりつつ個々の学生を指導されているご様子だった。正直なところ、私自身も岩本先生の良き理解者であったとは決して言えない。ある時、いつもの控えめなお口ぶりで、「分かってないなあ！」とため息をつくように私におっしゃったことが懐かしく思い出される。しかしそんな私も、最近になって、『遠野物語』の冒頭の一文を噛みしめる機会があった。「いかに印刷が容易なればとてこんな本を出版し自己の狭隘なる趣味をもって他人に強いんとするは無作法の仕業なりという人あらん。されどあえて答う。かかる話を聞きかかる処を見て来てこれを人に語りたがらざる者果してありや」。時代や場所を問わず、人間の暮らしには、我々を何か否応なしに語らせたり、行動させたりするような力が含まれている。民俗学がそうした力についての学問だとすれば、それは確かに現代の文化人類学にも深く通じていると思う。

岩本先生のご健康とますますのご活躍をお祈りしつつ、以上を送る言葉とさせていただきます。

（超域文化科学／文化人類学）

日本進化学会学会賞・木村資生記念学術賞の受賞＊に際して

金子邦彦

進化は学生の時からずっと興味を持っていた。ダーウィン進化論は、フィッシャー、ライト、木村資生らにより、集団遺伝学として理論的定式化が夙に完成している。とほいえ、なにか釈然としないものが残る。それはおそらく、それが「遺伝子の進化」の理論だからかもしれない。生物にとって生存し子孫を残せるかを決めるのは外に現れる性質、細胞で言えばいろいろなタンパク質の濃度や細胞の成長速度などであり、これらは表現型と呼ばれる。といっても、遺伝子によって表現型が一意的に決まるのであれば、「適した」表現型の選択は対応する遺伝子の選択に置き換えられる。それゆえ集団遺伝学の有効性は高い。しかし、表現型が遺伝子という規則からつくられるには複雑な動的過程（発生過程）を経なければならない。結果、同じ遺伝子を持っている個体（クローン）でも表現型はばらつく。ではこの表現型の分散と進化は関係しないのだろうか。

バクテリアなどでは同一遺伝子を持った個体間で各タンパク質の濃度や成長速度がどれだけ異なっているかは計測でき、その分布も得られる。一方、バクテリア程度なら実験室内で進化を十分に追える。二十年近く前、共同研究者の実験データを見ていて、表現型（この実験では蛍光度合い）の（クローン間での）分散とその進化速度との間の相関に気づいた。ここで、こうした相関をみようと思った背景には、アインシュタインのブラウン運動に始まる、統計物理の理論がある。それは、例えば、ブラウン運動での粒子の位置の揺らぎと、外力による移動度合いとの関係であり、一般的には力を入れていない時の揺らぎ（分散）と外力による応答との比例関係である。さて、先の実験では変異体の中から蛍光の高いものを淘汰していた。それを、表現型をある方向に引っ張ろうとした時の応答とみなせれば、蛍光という表現型の進化速度は、進化させる以前のそれの揺らぎと比例するのでは、という発想が出てくる。

もちろん統計力学の理論は平衡状態でなりたつものであり、生物はそれとは程遠い。また、淘汰過程も外力への応答と言ってよいかわからない。とほいえ異なるレベルの現象を結びつけるのは理論物理の醍醐味でもある。そこで表現型分布に対する定式化を行い、また細胞モデルのシミュレーションでもこの関係を確認した。

それで喜んだのもつかの間、新たな疑問が生じた。集団遺伝学側では、遺伝子が分布していることで生じる表現型の分散と進化速度が比例しているという定理が確立している。一方で我々が見出したのは同一遺伝子個体に対する、（非遺伝的）ノイズによる表現型揺らぎと進化速度との比例関係である。両者がともに成り立つにはノイズによる表現型揺らぎと遺伝子変異による揺らぎが比例しなければならない。しかし揺らぎの原因が異なるのでこれは自明ではない。遺伝子と表現型の分布が進化を通して安定しているという仮説のもと、なんとかこの関係をひきだし、また細胞を進化させる理論シミュレーションで、これを確認した。そして、この背後には、表現型がノイズに対して安定になっていくと遺伝的変異に対しても安定化するという、安定性進化があることを明らかにした。

ここでひと段落と思ったのであるが、よく考えると、表現型は元来極めて多次元である。例えば細胞内には数千種

7面へ

駒場をあとに

共に学んだ29年
―開かれた学びの場への想いをこめて

エリス俊子

私は駒場が好きだったんだなと思う。私に研究のおもしろさを教えてくれたところ、さまざまな出会いの場所。大学院時代をすごし、その後、海外の大学で日本文学の講師をして、教員として戻ることになって二九年。三十代から六十代の年月は飛ぶように過ぎた。教室の後ろの隅っこの席にそっと座ることが心地よかった私にとって、慣れ親しんだ教室の、前のドアから入ることの違和感は今でも覚えている。だんだんと神経が図太くなり、声も大きくなったが、授業が始まる前の緊張感からはついに解放されることがなかった。私に教えられるのかしらと思いながら、ときに学生たちに教わり、励まされ、授業を通して私も学び、鍛えられた。彼ら・彼女らはもう十分に大人なのだから、人間として対等に接するようにしようといつも考えていた。ほんのちょっと持っている知識を共有すれば、必ず手応えのある反応がかえってくる。それが前期課程の語学であれ、後期課程の専門科目であれ、あるいは大学院のゼミであれ、変わりはない。大学院になれば私は司会進行役の舵取りのようなもので、素材を提供して問題提起すれば自然に議論が進む。学生の発言を聞き、反応し、反響板となり、そして学生たちは自ずと育ってくれた。卒業生たちが素晴らしい研究を実らせて、国内外で活躍してくれているのは本当に嬉しい。学生主導で始まったゼミ研究会も活発につづいており、学内業務の負荷が大きくなるにつれて、学生主導の研究会は文字通り私にとって潤いの場所、オアシスとなった。今もつづいており、オンラインになったことが幸いして海外で研究に従事している学生や研究者も参加してくれている。先日は国内各地のほか、香港、ライデン、パリ、バンクーバーからの参加者もいた。卒業生たち、これから巣立って行こうとする人たち、（元）学生のみなさん、ありがとう。

大好きな駒場に戻ってきたのだからこのキャンパスでの教育活動に貢献できることはなんでもやりたいという思いに突き動かされてすごした年月だった。私が着任したのは部局化への移行が大詰めを迎えていたときで、すぐにかかわることになったのが英語Ⅰ列の大改革だった。現在は「教養英語」として定着しているが、「統一英語教材を用いる「英語Ⅰ」が最初の教科書を出したのが一九九三年である。ブレーンとなる人たちがいて、私は手足役だったが、数えれば総計七年間を「英語Ⅰ部屋」ですごした。

これとほぼ同時期に始まったのが、駒場の「グローバル化」にかかわる新制度の導入である。後にAIKOMと名付けられることになる短期交換留学制度の構想が浮上し、その準備委員会に入ったのが「事の発端」だった。世界各地から留学生を受け入れ、駒場の後期課程生を海外に派遣するプログラムを作ること。そのために教養後期課程に日本研究関連科目を中心とした英語のカリキュラムを設置・運営し、一年間滞在する留学生が駒場で学ぶための仕組みや生活支援の制度を整備すること。ここでも私は手足役だったが、以来、昨年サバティカルで海外に出るまで、産休期間を除いて、駒場及び全学の「グローバル化」関連事業にかかわりつづけることになった。「エフォート率」でいうと八〇パーセントは優に超えていたと思う。一九九五年に初めての交換留学生を迎えて以来、AIKOMプログラムのもとで受け入れた交換留学生は五三二名、協定校に派遣された学生は四五五名、他にチューターや授業参加を通して多数の在学生が留学生と経験を共にした（AIKOMプログラムの立ち上げとその後の展開については『駒場の七〇年』に書かせていただいた）。USTEP全学交換留学プログラムが始まりAIKOMはこれに統合されることになるが、その後も駒場で育ててきた「グローバルに／共に学ぶ」伝統を継続したく、学融合グローバルスタディーズ（GS）とGlobal Studies in Asia（GSA）を作ることになった。総合的教育改革のグローバル化担当として、前期課程の「国際研修」、後期課程の学融合グローバルスタディーズの設置にかかわったが、まだ道半ばである。今はPEAKもあり、GSI構想のもとでさらに豊かな教育・研究環境が整いつつあるが、前期から後期を通して、学生たちが多様なバックグラウンドを持つ仲間と共に日常をすごし、共に学び、開かれた眼を養うことができるよう――もちろん海外からの仲間に限るものではない――そしてグローバルな意識を培って元気よく羽ばたいていってくれることを切に願っている。自身の研究と直接つながらないこともあってこの「グローバル教育」にかかわる担当教員の過重負担の問題は積年の課題であるが、グローバリゼーションオフィスをはじめとして様々な支援体制もできたし、そして何よりもその後の卒業生の活躍する姿を見ると努力は十分に報われるものだと感じている。教養学部の良き伝統あってこその多彩で骨太の国際教育だが、先行きの見えない現代にあってその重要性はさらに増していると思う。次世代の教員に託したい熱い想いがある。

最後に、同僚の教職員の皆さま、ありがとうございました。英語部会と言語情報科学専攻の一員としてすごした年月への思いは尽きることがありません。これからはもっと研究の話がしたいですね…サバティカルをいただいてようやく日本近代詩の本を書きはじめました。そして委員会でご一緒した多分野の先生方（これも駒場だからこそ）、またいつも快く、根気よくサポートしてくださった事務の方々、本当にお世話になりました。

（言語情報科学／英語）

送る言葉

エリス先生を送る言葉
―言葉に尽くせぬ感謝をこめて

小林宜子

一九九二年のご着任以来、本学の国際化推進のために計り知れない貢献をなさってこられたエリス先生が、駒場の多様化への歩みに大きな足跡を残し、ご定年を待たずに他大学に移られる。AIKOM短期交換留学プログラムが発足し、最初の留学生を迎え入れたのが一九九五年の秋。エリス先生はその準備段階からプログラムの運営に深く関わり、その後二十年以上にわたってプログラムの発展を支え続けた。AIKOMがその役割を終え、全学の交換留学プログラム（USTEP）に統合された際には、その制度設計の中枢を担い、また留学生と在学生が共に学べる環境を維持するために、新たなプログラムの設立に奔走なさった。この一連の経緯は、先生ご自身がお書きになった「AIKOM短期交換留学プログラムの三年」と題する文章の中に詳述されている。二〇二一年に刊行される『駒場の七〇年』に収録される予定だが、このたび、先生のご好意により、一足早く拝読する機会に恵まれ、先生の熱意にあらためて敬服するとともに、上記のプログラムに参加した元留学生、派遣生を通じて世界各地に交流の輪が広がっていることに強く心を動かされた。

だが、先生のご功績には、この文章には書かれていない側面がある。先生ご自身は「声を大きくして報告するようなことではない」とおっしゃるけれど、先生の献身的なお仕事ぶりを間近で拝見してきた同僚の一人として、あえてここに記しておきたい。AIKOMプログラム発足後の十年余りは、留学生を支援する体制がまだ十分に整備されていたわけではない。そのため、先生は留学生たちを生活面でも支えようと、来日した学生が寮生活に慣れるまで親身になって世話を焼き、体調を崩した学生の診察に付き添い、入院すれば毎日欠かさずに病室を見舞われた。震災が発生した際には、全員の居場所を確認し、寮に荷物を残して急遽帰国した学生の部屋の片づけに行かれたこともある。そうやって、初めての土地で不安を抱える学生たちに真摯に寄り添い、ご多忙を極める日々の中でも、助けを必要とする学生のためにご自分の時間を惜しみなく割いておられた。

先生のこうした親身な優しさの恩恵を受けたのは、留学生だけではない。助言を求める相手とは、それが学生であれ、同僚であれ、真剣に向き合ってくださった。そして、対象に寄り添う姿勢は、先生がお書きになる詩の批評においても一貫している。詩の言葉を大切に慈しんで綴られる先生の論考は、明快な論理と繊細な感性が見事に調和し、先生のお人柄を映し出しているようで味わい深い。

国際教育の充実のために休むことなく走り続けたエリス先生は、きっと新たな環境に移られた後も、歩を緩めることなくお仕事に邁進なさるのであろう。しかし、これからは少しでも多くの時間をご自身のためにお使いになれますように。言葉に尽くせない感謝の思いとともに、そう願わずにはいられない。

（言語情報科学／英語）

6面より

類のタンパク質が存在し、それぞれの濃度の変化は数学的に言えば数千次元の状態空間で起こる。一方で先の理論は1つないし数個の変数に対する分布理論である。なぜうまくいくのだろうか。

その疑問を解くきっかけは数年前、細胞内の数千種類のmRNAやタンパク質の各濃度が環境条件とともにどう変わるかの実験結果を眺めているときに掴めた。数千成分の変わり方がおよそ、あるライン上に制限されていたのである。これはなぜだろうか。ここで、先述の安定性に着目する。細胞が成長して分裂後も各成分の濃度が維持されているなら数千もの成分が皆、同じ割合で増えていくはずである。さらに、この定常的成長状態は、ノイズに対して安定でなければならない。説明する紙数は尽きてしまったけれども、この要請から、表現型の変化に数千次元の方向があっても、主に変われる方向は1ないし少数に制限されることが導かれる。

熱統計力学では粒子の数が膨大でも安定した平衡状態は少数で記述できる。それと類似した理論が生物の適応、進化に対しても垣間見えてきたのである。そして、このような変わりやすい方向の制限の結果、（遺伝子の変化がでたらめに生じても）表現型の進化しやすい方向には強い拘束が現れる。こうした進化の方向性と拘束はバクテリアの実験でも確認され、さらには生物一般にどこまで成り立つかを探るプロジェクト（新学術領域研究、倉谷滋代表）も始まっている。また、生物に共有される普遍的性質を探る研究は共鳴者も増え、駒場と本郷との連携で生物普遍性研究機構が四年前に発足している。

今回の受賞は三つの点で特別な感慨がある。一つは以前いただいた数理や物理での賞が主に若いときに一人で進めた研究への評価であったのに対して、今回は研究室のメンバーや仲間たちとの共同研究の賜物であること。実際、上で述べた一連の進化研究の多くはうちの研究室出身で実験と理論の二刀流を見事に遂行している古澤力さん（現理学系研究科）との共同研究である。また受賞理由には分子生物学のセントラルドグマを、物理でいう対称性の自発的破れで説明した竹内信人さん（現オークランド大）との研究、階層進化理論でレヴィストロースの親族の構造を説明した修士2年の板尾健司さんの研究も挙げられている。

第二には、受賞理由に、『生命とは何か』『普遍生物学』の上梓（ともに東京大学出版会）による若い世代への刺激を挙げていただいたこと。これらの書が次世代の潮流への一助となっていれば喜びこの上ない。

そして第三は、物理出身の、生物学「無免許」研究者に、生物の賞を授けていただいたことへの感激。普段、統合自然科学科の学生に、分野を越えて深く広く学ぶことの意義を語っている身としては、これで数理、物理、進化生物で多少なりとも認知され、やっと統合自然科学科の教員のスタートラインに立てたかなという思いもある。これを機にますます、分野の垣根のない、駒場の利点をいかした研究、教育に精進したい、と結びたいところなのであるが、定年まであと一年余となってしまった。ここまで、自由な研究の場を与えてくださった駒場の雰囲気、母体となった複雑系生命システム研究センターにあらためて感謝したい。

（相関基礎科学／物理）

＊ http://sesj.kenkyuukai.jp/special/index.asp?id=33354

駒場をあとに

フランス語からイタリア語へ

池上俊一

私が駒場に着任したのは一九九四年四月のことである。最初の頃は、事務職員の方々に学生と間違えられていたのに、次第にそういうこともなくなっていった。間違えられるということでは、十八歳で文科三類に入学してしばらくは、逆にひどく老けて見えたのか、駒場キャンパスで何度か教授に間違われた。とにかく、あっという間の二十七年間だった。

東大に奉職する前には、横浜国立大学教育学部の歴史学教室に、四年間お世話になった。横国大ではもっぱら西洋史を教えていたが、駒場では主にフランス語を教えることになった。フランスに留学し、パリで学会報告なども何度かしてきたものの、フランス語を教えた経験のなかった私に、同僚となったさる先生から、フランス語をしっかり教えてもらわないと困る、駒場に来てからも研鑽を積んで必死で努力するように、と釘を刺された。そう、私の専門はヨーロッパ中世史だが、その専門領域での業績以上に、語学を教える能力が期待されていることが、その言葉の裏からひしひしと伝わってきた。

実際、フランス語教室（後に部会と呼び名が変わる）には、恐ろしくフランス語の堪能な俊秀教師ばかりが、二十余名勢揃いしていた。専門も、ほぼ全員がフランス文学・語学・思想という「同質集団」で、やや異質なのは、美術史の三浦篤氏と私の二人のみであった。孤立と劣等感で、「こりゃ、えらいところに来てしまった」と臍をかんだが後の祭りで、頑張るしかなかった。

もともと語学の勉強は嫌いではなかったので、クラス授業を受け持ちながら試行錯誤を繰り返し、良い授業になるよう懸命に努めた。学生のフランス語力がグングン上達するとやり甲斐を感じたし、学生たちは、本郷に進学したり卒業した後も、フランス語教師の私を覚えていてくれて、嬉しかった。いつしか私も、教養教育における外国語重視の牙城としての駒場に所属する者として、外国語諸部会の同僚たちの考え方に同調していった。どこから圧力があったのか知らないが、駒場でも外国語の犠牲の下に専門研究を優先する動きが何度かあり、学生が取るべき必修外国語の単位数は、大幅に減っていった。そしてそれと並行して、大学を包む空気は、文徳を失っていったように思う。

こうして語学教師としての使命に目覚めた私には、早い時期から、ひとつの宿願が宿っていた。大好きなイタリアの研究を駒場でもできるようにしたい、そして駒場キャンパスをイタリア的ないし地中海的な、深い人文的叡智と、人の好い陽気さの溢れる空間としたい、という願いだ。そしてそのための重要な第一歩として、イタリア語を初修外国語に格上げしなくては、と考えた。イタリア語はずっと、第三外国語の一角を占めるにすぎなかったのだ。

この計画は、幸い、フランス語部会にいらした、宮下志朗、工藤庸子、石井洋二郎、鈴木啓二の諸先生方の応援もあり、まず専任のイタリア語教員を採用するところから始まった。そして才気煥発、体は小さいが百人力の村松真理子先生を採用することができた。その後村松先生と宮下先生と私の三人、力を合わせて――フランス語部会の先生方、また英語部会の高田康成先生などの後押しもいただいて――なんとかイタリア語の初修外国語化実現に漕ぎ着けた。しかしけっしてスムーズに進んだわけではなかった。

「草の根」からの制度変更・新組織設立運動の宿命なのか、学部長室への説明・陳情、夥しい書類作成、学生アンケート、駒場および本郷の各レベルの会議での承認…といったことで、何年もかかったし、他の外国語の先生方には、自分たちの既得権領域に新たにイタリア語が割り込むと見えたのか、私には不合理としか思えない理由で反対する人も多かった。それでも、二〇〇七年文科三類でのイタリア語の初修外国語化が成り、二年後文科一・二類に、二〇一二年には、理科にも開かれた。

ところがいくら必要性を訴えても、三人目の専任教員がどうしても採れなかったので、フランス語の先生方には申し訳ないとは思ったが、今から数年前、やむなく私自身がイタリア語教員になった。そしてまた一から一生懸命イタリア語教師としての研鑽を積んでいるうちに、退職の時が来てしまった、という次第である。

私の「宿願」との関連でもうひとつ付け加えると、イタリア語の初修外国語化が成った後、その前期課程での教育成果を後期課程にもつなげていく必要性を感じた。超域文化科学科、地域文化研究学科、総合社会科学科の三学科を統合して教養学科とする二〇一一年の改組を千載一遇の好機として、希望を出し、二年後「イタリア地中海研究コース」を地域文化研究分科内に新たに創ってもらうことができた。これはイタリア語の初修化ほど大変ではなかったが、それでも苦労は少なくなかった。

ともあれ、私の宿願の足場となる体制を実現させてくれたのは、駒場の懐の深さゆえだろうと、いろいろあった心の中の蟠りも解けて、今では感謝の気持ちで一杯である。

フランス語・イタリア語部会の先生方をはじめ、お世話になった先生方、また学生の皆さん、長い間お付き合いいただき、本当にありがとうございました。皆さまのご健勝と駒場のさらなる発展を心よりお祈りしています。

（地域文化研究／フランス語・イタリア語）

送る言葉

驚異の歴史家

田中創

池上俊一先生とは同じ西洋の古い時代を専攻しているというご縁もあり、色々なところで仕事をご一緒させていただく機会に恵まれた。常に冷静沈着で、朴訥とした語り口ながらも、本質を抉り出す鋭い発言をされる姿を横目にしてきて、大学教員はこうあるべきだなぁと、身の動きも心も落ち着きのない、私は感じていた。（実際、私はいい加減なので、後期課程HPの作成時に手元によい写真がなくて、ゴシック建築の写真を『ロマネスク世界論』の著者に添えてしまいました。この場を借りてお詫びします。）

今でも印象に残っているのは、先生の研究室で一度お会いした際に、びっしりと予定で埋まった手帳を拝見した時である。駒場の教員の忙しさを目の当たりにしたという悲劇的な瞬間でもあったが、それ以上に、このようなスケジュールをこなしながら、数々の著作を陸続と発刊なさっている先生の活動力に驚かされた。実際、先生の著作は単にその量のみならず、内容の多彩さにも圧倒させられる。十字軍や王、都市といった中世史の王道のテーマに始まり、狼男などの驚異譚、パスタ、音楽、遊び、お菓子などスコラ学的多様さを誇る。もちろん、アナール派の大家ジャック・ル・ゴフの門を叩いたことにも表れているように、後者のような社会史的なアプローチこそが先生の本領である。そうは言っても、生活・心性・伝説といった掴みどころの見出しにくいテーマを扱いながら、王権や国家といった固い論題を見据えて、一貫した論理性を持った中世世界を描き出す手腕は驚異そのもの。さらには、古代ローマの独裁官ユリウス・カエサル（私にかかると名前の響きからして単なる強面）を、カエルくんならぬ柔和な「カエサルくん」として登場させる子供向け絵本まで手掛けるのだから、如才ない。

そんな先生の意外な一面は、スイーツ・パトロールという名の、甘味探しを趣味とされていることであった。しばしばご著書の中でも五感にまつわる分析をされる先生だが、実生活でも五感（特に味覚？）を厳しく鍛錬していたのだ。ある料理店に、林檎の収穫期が来たので、タルト・タタンを作り出しているかどうかを毎年のように電話で確認しているというお話をうかがったときには、歴史家のまめまめしさはこういう風に発揮するのかと、舌を巻いたものである。また、教育面でのフットワークも軽く、長らく一・二年生向けにはフランス語を教えられていたが、近年やにわにイタリア語教育に転身された。いずれの言語もラテン語の一変化形として見てしまえばそれまでだが、その若々しさはそうそう真似できるものではない。そんな先生が定年退職を一年前にして、駒場を去られると聞いたときも寝耳に水であったが、行動的な先生であればむべなるかなと妙に納得したものである。駒場の森の呪縛（？）から放たれた先生がこれからどのような仕事を発表されるのか。さらなる驚きを期待してやまない。

（地域文化研究／歴史学）

私達の時間スケールでみえる「ガラス」を理解する

水野英如

ガラスのコップ、プラスティックのペットボトル、道路のアスファルトと、私達の生活においてガラスは欠かせないものです。「ガラスは固体か？液体か？」という問いをよく耳にします。これに対して、「ガラスは粘度が極端に大きい液体」と回答できます。熱力学にあてはめると、ガラスは平衡状態には無く、平衡状態に向かって物凄くゆっくりと緩和している状態と言えます。この緩和は途方も無く長い時間スケールで起こっており、例えば、世の中には1億年前の琥珀といったガラスが存在します。ここまでくると、「最終的には平衡状態のガラスに緩和するのか？」という疑問が浮かびます。

しかしながら、私達の生活において、私達の時間スケール（例えば、秒、分、時間のオーダー）でみえる「ガラス」は、明らかに剛性がある固まったものです。「途方も無い時間スケールでみえるガラス」や「平衡状態のガラス」よりも、私達の時間スケールでみえる「ガラス」を理解する方が、私達の生活にとっては実用的で有益かもしれません。そこで、時間スケールを私達の時間スケールに限定しましょう。そうすると、ガラスを「擬似的な平衡状態」とみなして、熱力学・統計力学を適用できるわけですが、そのガラスは「固体」とみてよいでしょうか。

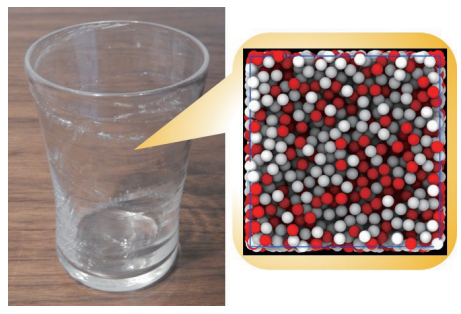
ここで、固体の話をします。真に平衡状態にある固体は、「結晶」です。そのため、物理学では固体というと通常は結晶を指します。結晶では分子は規則的・周期的に配置し、そのまわりを振動します。結晶の物性を記述するには、まず、分子の振動が小さいという「調和近似」を課して、理論を構築します。この近似は温度が小さい領域で正しくなります。そして、温度を上げて振動が大きくなる効果を「非調和性」として扱い、調和近似の理論を補正します。結晶の物性、例えば熱容量や熱伝導率は、この調和近似から始める方法によって説明できます。

では、結晶で上手くいった方法をガラスに適用してみましょう。ガラスでは分子は不規則な状態で配置しています。したがって、分子が不規則な配置のまわりを振動すると想定します。そして、振動が小さいとする調和近似の理論を構築し、非調和性によって補正します。こうしてできた理論は、ガラスの物性を説明するでしょうか。残念ながら、「いいえ」です。結晶で上手くいった方法は、ガラスには通用しないのです。一体、ガラスでは何が起こっているのでしょうか。

この問題を解決すべく、「分子シミュレーション」を用いて、ガラスの分子振動を解析しました（図）。その結果、ガラスでは分子の振動に加えて、分子の「再配置」が絶えず発生することが分かりました。結晶の常識に反して、ガラスでは分子は一つの配置のまわりを振動するのではなく、配置を時々刻々と変えながら振動することが分かったのです。このことから、配置の変化を想定しない調和近似ベースの理論が、ガラスに通用しなかったことが納得できます。

再配置は空間的に局在化しており、一回の再配置では僅かに十から千個の分子がせいぜい分子径程度、動くのみです。物質はモル（10の23乗個）の分子から成るので、再配置は微視的な現象と言えま

9面へ



分子シミュレーションを用いて、ガラスの分子振動を解析した。

駒場をあとに

a land of milk and honey

寺澤　盾

私が駒場に助教授として赴任したのは一九九二年四月ですので、三十年近く自然豊かなキャンパスに通ったことになります。一九九〇年代初頭といえば、いわゆる大学院重点化（学部を基礎とした組織から大学院を基礎とした組織への変更）が始まったころであり、教養学部も一九九三年四月からの組織改編に向けて大きな変動期を迎えようとしているときでした。さらに、駒場では大学院重点化とセットで前期課程教育の改革も求められ、私が所属した英語教室（現在の英語部会）でも大幅なカリキュラム改革がまさに始まろうとしていた時期でした（統一教科書による英語授業、いわゆる英語Ⅰが始まったのも一九九三年四月からです）。前任校は都下の国立大学でしたが、少なくともその当時は（よく同僚とテニスをするなど）牧歌的な雰囲気であったので、異動早々こうした改革の嵐に遭遇し少なからぬショックを受けたことを記憶しています。また、かつて駒場で教えていた父（英語）と叔父（物理）からも駒場の様子を聞いており、教員がそれぞれのペースで自由にゆったり研究している印象を持っていたので、なおさら「話が違うじゃない」という気持ちにもなりました。余談になりますが、当時の外国語教員の研究室は9号館にあり、教員数に対して部屋が足りないため二人一部屋が普通であったと思います。私も別の英語の先生と研究室をご一緒させていただきました。ただ、なぜかその部屋には電話回線が引かれていなかったので設置をお願いしたところ、すぐに対応してくださったのですが、電話番号が別の（それも大学院時代にお世話になった先生の）研究室と共通であり、電話がかかってくるとしばしば元指導教員のお部屋まで駆けていき「お電話です」とお伝えしたのが懐かしく思い出されます。大学院重点化で新設された専攻では、学内におけるインターネット回線のことが話題となっていましたので、「インターネットよりもまずは電話でしょ」と心の中で思ったものでした。

このように駒場における最初の数年は、正直なところ私にとって必ずしも居心地がよいとは言えないものでした。それにも関わらず、その後四半世紀あまりにわたり駒場で過ごすことになったのは、何よりも素晴らしい人的環境があったからであると思います。それぞれの分野の第一人者の先生方に囲まれて知的刺激に事欠くことはありませんでした。また、大学の行政に関して重責を担われていながらも非常にプロダクティヴに研究成果を発表されている同僚の先生方の様子からプロフェッショナルの真髄を拝見できたことも（それに見習えたかどうかは別にして）得難い経験となりました。さらに、私自身も大学行政上のお仕事をいくつかさせていただきましたが、一を言えば十をしてくださる職員・嘱託の方々に大いに助けていただきました。

駒場はいわゆる三層構造をなしていますが、それぞれのレヴェルでさまざまな授業を担当したことも私にとって大きな財産となりました。ジュニア（一、二年生）では、英語一列や英語中級などを担当しましたが、英語Ⅰの統一テクストであるThe Universe of Englishや『教養英語読本』などからは、私自身も学生と一緒に「17世紀のオランダ絵画」、「知覚の歪み」、「人工知能とチューリング・テスト」、「古代都市ポンペイ発掘」など文理にまたがる興味深いテーマを学ぶことができました。シニア（三、四年生）では専門である英語史・中世英語英文学だけでなく、中国語や日本語を専門とする先生方と一緒に「言語の変化・変異論」という授業を講じたり、AIKOMでジェンダーをテーマにした授業を担当したりして視野を広げることができました。大学院の学生には『ベーオウルフ』などの中世英詩を精読する苦行に付き合っていただきましたが、総合文化研究科は専攻間の垣根が低いので他専攻からの受講者も少なからずあり、そうした多様な学生が参加する授業から多くのインスピレーションをいただきました。研究はもちろん研究室や書斎にこもって一人で行うこともできますが、三十年近く教壇に立って感じるのは、（とりわけ駒場のように多様で優秀な学生が集まる環境では）教員と学生が集う教室という空間は思ってもみない化学反応を生み出す場であるということです。

駒場にいらしてまだ間もない若い先生方のなかには、おそらく三十年前と変わらない（あるいはそれ以上の）忙しさを前に、かつての私のように戸惑いを感じていらっしゃる方もいるかと思います。しかし、そうした憂慮があったとしても、駒場という環境はそれを補って余りあるものを与えてくれる豊穣の地（a land of milk and honey）であると、私は今確信を持って申し上げることができます。

定年を待たずに駒場を去ることになりましたが、新たな職場への通勤の際は駒場東大前駅を通ることになるかと思います。車窓から今後の駒場のさらなる発展を見守りたいと存じます。長年にわたる皆さまからのご厚情に感謝しつつ。

（言語情報科学／英語）

送る言葉

紳士＝真摯なる学究の徒

大石和欣

そのeメールはまさに「青天の霹靂」だった。英語で言えば“out of the blue”になる。そういえばなぜ英語も日本語（中国・南宋の詩由来）も同じ表現なのだろう。驚きのあまり言葉が出ないというなら、“stunned”あるいは“astounded”も使える。だが“stun”と“stoun”と近似した発音が含まれているのは、同語源だからなのだろうか。

eメールの差出人が、英語史の権威である寺澤盾先生だったので、驚きつつもそんな英語の不思議に頭を捻ってしまった。連絡の内容が今年度末で東京大学を辞職するというものだったので、仰天するのも当然である。前期課程では英語部会、後期課程・大学院は言語情報科学専攻と所属を同じくし、英語部会では寺澤先生が主任を務められたときに補佐として二年間、主任室に机を並べて苦楽を共にした仲である（もちろんそもそも「楽」はゼロに等しく、主任のほうが圧倒的に「苦」の比重が高かったが）。部会主任の重責を終えられた後、切望されていたサバティカルを取られることなく、副教務委員長、教務委員長とさらに四年間教養学部の重責を担われてきた。とりわけコロナ対策に翻弄されることになったこの一年間、私が副学部長として前期課程の運営に関わる際にも寺澤先生の知見と判断を頼りにしていた。その先生が駒場を去るという事態はまったく思いもよらないことであった。

端正な容姿に温厚かつ誠実なお人柄が融和している寺澤先生には、自然と周囲から信頼や相談が寄せられる。常に冷静かつ親身に対応し、柔和な態度で接して下さる先生は、理想の同僚あるいは先生として崇敬の念を喚起する。実際先生を敬愛する学生ファンは多い。一言で言えば「紳士（gentleman）」なのだ。

しかしながら、寺澤先生の“gentle”な物腰の背後には、堅牢な意志と厳格な信念が潜んでいることも見逃してはならない。古英語を中心とした英詩の韻律や英語史、とりわけ社会言語学や語用論を含む幅広い射程で英語の変遷を辿っていくのが、寺澤先生の研究である。一つ一つの言葉の歴史的・社会的布置を丹念に解きほぐしていく作業はもちろん、膨大な量の一次資料・二次資料のデータを分析していく作業は骨の折れるものだが、寺澤先生は真正面から信念を持って正攻法で取り組んでいく。授業では持参した分厚い手書きのノートを手に、博学な知識を披露する。海外でも知名度が高い一方で、『英語の歴史―過去から未来への物語』（中公新書、二〇〇八年）、『英単語の世界―多義語と意味変化から見る』（中公新書、二〇一六年）などを通して日本の一般読者にも、実直な語り口で斬新な英語史の世界を提示している。研究対象に対しても、研究アプローチそのものに対しても、そして学生や同僚、一般読者にに対しても「真摯」なのである。そう、寺澤先生は「紳士」かつ「真摯」な学究者なのである。

教養学部に入学した最初の授業でご尊父である故寺澤芳雄先生の教えを受けた私としては、寺澤先生（家）のいない駒場は想像できず寂しい限りであるが、今後は愛するご家族との時間を増やしながら、新天地でのご活躍をお祈り申し上げたい。

（言語情報科学／英語）

8面より

す。また、分子は再配置を繰り返しますが、液体の流動のように不可逆的に遠方に拡散することはなく、あくまでも拘束された空間内を可逆的に動きます。したがって、再配置は、液体の流動とも固体の振動とも異なり、これら二つの中間的な運動と捉えることができます。この意味において、「ガラスは固体と液体の中間的な状態」と言えるでしょう。

さらに、再配置は僅かでも熱（温度）を与えると発生することが分かりました。再配置を微視的な破壊現象とみると、ガラスはほんの僅かな刺激によって壊れる固体、あるいはギリギリ安定性を保っている固体、と捉えることができます。この「限界安定性」は、ガラスの形成過程で生まれると考えられます。液体を冷却していくと不安定性がどんどん解消されていき、ついに安定性を得たタイミングで固化の過程が止まり、ガラスが形成されます。こうしてできたガラスは、不安定と安定のちょうど境界上に位置する状態、つまり限界安定な状態にあると考えることができるわけです。

以上をまとめると、「ガラスは限界安定性を有した、固体と液体の中間状態」と言えます。鍵となる点は限界安定性であり、そして限界安定性はガラスの形成過程に起因します。したがって、真にガラスを理解するには、ガラスの形成機構を理解しなければいけません。「どのようにして液体はガラスとして固まるのか?」を理解する必要があります。実はこのシンプルな問いこそが「ガラス転移」の問題であり、物理学における未解決問題の一つです。ガラス転移の機構が分かったとき、ガラスの本当の理解が得られます。さらには、途方も無い時間スケールの緩和の先にある（と信じられている）「平衡状態のガラス」の正体が掴めるのかもしれません。

（相関基礎科学／物理）

～学生・教職員のみなさまへ～
新型コロナウイルス感染症　感染報告フォームについて

新型コロナウイルス感染症に自らが感染した場合、自らが濃厚接触者となった場合、その他感染が疑われる場合（無症状、疑似症も含む。）は、本フォームからご報告をお願いします。
収集した情報はプライバシーに配慮して厳重に管理し、新型コロナウイルス感染拡大防止以外の目的には使用しません。

＜新型コロナウイルス感染症　感染報告フォーム＞
https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=T6978Hr10eaAgh1yvlMhKDtdkpueeJEhV57qOnnlrpUNUlUSktNQ1BDUDZZR1I3NjROTEdUMVVLNy4u

鳥のDNAは「三密」を回避していた？

宇野好宣

「キミの研究対象の動物種はコロコロ変わるよね」

これは、私、二〇二〇年十月に大学院総合文化研究科広域科学専攻 生命環境科学系の助教として着任した宇野好宣が、知り合いの研究者に言われた言葉である。多くの生物学者は非常に長い間一つの実験生物を使用しており、引退するまで生涯たった一つの生物種のみしか扱ってこなかった先人の研究者もめずらしくない。しかし私は、北海道大学理学部の学部四年生から研究の世界に入って以来、魚類メダカ、爬虫類ヘビ、そして哺乳類ハムスターなど、多岐にわたる生物を解析対象としてきた。ジンベエザメの血液サンプルを少し分けていただくため、このサメの健康診断用に月に一回の採血を実施している美ら海水族館や大阪の海遊館に通ったり、鳥の生体サンプル確保のために動物園を訪れ、許可を得た上で檻の中に落ちている新鮮な羽毛を拾わせていただいたりもした。また、東大駒場キャンパスの「レジェントな研究者」である浅島誠先生と共同研究をさせていただき、アフリカツメガエルというカエルも使ったこともある。ここまで多岐にわたる動物を扱っている研究者は珍しいと思う。しかし、私を魅了し続けてきた研究対象は一つである。それは我々やこれらの動物種がもつ、「染色体のカタチと数の違い」だ。

「私たちヒトは46本の染色体をもっている」、これは中学や高校の生物の授業でも習うことである。しかし同じ背骨をもつ脊椎動物でも染色体の数やカタチは大きく異なっている。ヒトは46本であるが、ジンベエザメは102本、ニワトリは78本、ワラビー（私の写真、横に写っているカンガルーの仲間）は16本しか染色体をもっていない。染色体のカタチについても、ヒトの場合、一番小さい染色体は一番長い染色体の5分の1程度であり、ほとんどの染色体は「どんぐりの背比べ」である。しかしニワトリなどの鳥では、すべての染色体（70から80本）のうち、60本程度のほとんどの染色体は、ヒトの一番小さい染色体よりはるかに小さいのである。

染色体は言わば、「DNAや遺伝子を運ぶ乗り物」である。修学旅行に行く高校生と先生を「DNA」に、移動交通手段を「染色体」に例えるのであれば、ヒトが大型バス5台と小型バス3台を使用している一方で、ニワトリなどの鳥は大型バスと小型バス2台ずつだけでなく、一部の生徒を先生の自家用車やタクシー10数台に乗せているようなものである。現在のコロナ禍のように、「三密」を防ぐためであれば素晴らしいと評価されるべきなのだが、もちろん鳥のDNAはそんなことを想定していたわけではない。多種多様な研究分野の研究者の方々がいらっしゃるこの東大駒場キャンパスで、これからも多種多様な動物を用いて、それぞれの生物種が独自にもつゲノムや染色体、DNAの進化学的な面白さを学生に伝えられるような研究・教育活動に精進していこうと思っている。

（生命環境科学／生物）

北の国から vol.2

岩井智弘

総合文化研究科広域科学専攻・講師着任を翌日に控えた令和二年十月末日、慌ただしく職場と自宅を片付け、一足早い晩秋の新千歳空港を飛び立った。飛行機の急加速と相まって、期待と不安の入り交じった気持ちは高まっていく。この感覚は初めてではない。

私は群馬県西部の山あいの地に生まれた。裏山には秘密基地を作り、近くの小川には沢蟹や蛍がいる自然豊かな環境で育った。現職の専門である化学とはおよそ縁遠い家庭であったが、両親は子どもの「なぜ?」に寛容で、興味をもった科学実験教室に連れて行ってもらっていた。子供心に芽生えた知的好奇心の探求が、私の研究者としての原点なのかもしれない。

三人兄妹の次男坊の性（さが）であろうか。地元の高校を卒業した後は県外に出たいとの思いで、北海道・札幌の大学を受験した。大学では有機化学を学びたいと考えていたが、入学後すぐに開講された教養講義で衝撃を受けた。そこには、美しい分子構造をもつ化学触媒の魅力を生き生きと楽しそうに語る教員の姿があった。この講義に感銘を受け、「私もこんな研究がしたい!」と早々に将来の道を決めてしまった。実際のところ、講義内容の一部は大学院レベルであったために当時の私にはほとんど理解できなかったわけだが、この時に経験した学生の心に響く講義は、大学教員となった今の私の目標となっている。

卒業研究で師事した指導教員が他大学へ異動することを受け、博士後期課程からは京都へと移った。慣れ親しんだ北海道を離れ、限られた時間のなかで学位取得を目指して京都に向かう飛行機はまさに片道切符であった。将来への不安に苛まれながらも、実験だけが唯一の解と信じて、ひたすら実験台に向かった。幸いにも、二、三の新しい触媒反応を見つけることができ、多くの人の助けを得て学位を取得することができた。研究環境を変えることには大きなエネルギーが必要な分、その先には見たことのない景色が待っている。新たな地でいただいた出会いが、その後の人生を豊かにしてくれたと確信している。

学位取得後は前職である北海道大学にてご縁をいただき、今度は大学教員となって札幌に戻った。分子デザインを基盤とする高性能有機合成触媒の開発をテーマに掲げ、母校の学生とともに研究に打ち込んだ。プレーヤーからマネージャーへと立場が変わることによる戸惑いや悩みは尽きないが、進むべき道を示してくれたのは上司であり、同僚であり、現場の学生であった。少ないながらの講義経験も通じて、今の自分は大学入学当初に描いた想いに近づけているのだろうか。

そんな自問を続けながら羽田空港の滑走路に降り立つ時には、これまでお世話になった多くの人の顔が頭に浮かんでいた。いただいたご縁の上に自分がいることに改めて気付かされる。北の国から二度目の出発となる。新しい出会いを触媒にして、駒場での教育研究に邁進していく所存である。

（相関基礎科学／化学）

環の世界の階層の探求

伊山　修

十月に名古屋大学から異動しました伊山修と申します。よろしくお願いいたします。札幌で生まれ育ち、京都大学で学位取得後、兵庫県立大学に三年半、名古屋大学に十五年ほど在籍しました。これまで都会の喧騒とはあまり縁が無かっただけに、新鮮な心持ちです。現在はコロナ禍のため名古屋に居住しておりますが、一日も早く新しい街で仕事できることを心待ちにしています。

代数学、特に環の理論を中心に研究を行っています。環とは整数や実数、複素数のように加法、減法と乗法のできる集合のことで、他にも行列の全体、多項式の全体、関数の全体など環には様々なものがあります。これまで環の世界の階層をより良く理解することを目指して研究を続けてきました。

実数や複素数のように、除法のできる環を体と呼びますが、体は環の中で最も簡単なクラスです。線形代数では体に対してベクトル空間を考えますが、同様に環に対しては加群というものを考えます。通常、環は多くの加群を持ち、その全体を理解することは容易ではありません。そのため適切な意味で有限な環を調べます。有限の意味は状況に応じて様々ですが、その一つに有限表現型があります。例えば体上の加群は基底を持ちますが、これは全ての加群が一次元ベクトル空間から（直和として）構成されることを意味します。このように加群を構成する最小単位を有限個しか持たない環のことを有限表現型と呼びます。

点と辺からなる構造をグラフと呼びますが、辺が向きを持っている場合には箙(quiver)と呼びます。箙からは道代数と呼ばれる環が構成されます。Gabrielは七〇年代末に、箙の道代数が有限表現型であることと、箙がディンキン図形と呼ばれる特別なグラフに向きをつけて得られることが同値であることを発見しました。ディンキン図形は、数学の様々な分類に現れる普遍的な構造です。この発見を契機として箙の重要性が広く認知されました。

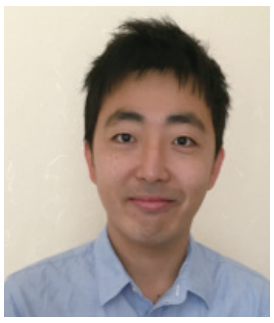
一方、環の大きさや複雑性を測る不変量として、次元と呼ばれるものがあります。箙は大域次元が1、Krull次元が0（サイクルを持たない場合）の特別な環なのですが、より一般の環に対しても有限表現型の分類を問うことは自然な問題で、様々な結果が知られています。私は、このような素朴な問いにより良い答えを与えること、そしてそれによって環の世界地図の範囲を拡大することを目指して研究を進めてきました。

コロナ禍の前は、海外への渡航が年に数回ありましたが、それが無くなって数ヶ月が経過しました。現在は、セミナー聴講や研究上の議論もオンラインで行うことが普通になり、毎日手軽に国内外の講演を聴講できるようになりました。二年に一度、開かれていた環論の国際研究集会ICRAも十一月にオンラインで開催されました。確かに便利なのですが、渡航のために国際便に乗って雲の上で過ごす時間が、研究の見晴らしも良くなる気がして、私にはお気に入りでした。対面での共同研究も待ち遠しいです。

（数理科学研究科）

微生物との会話における教養の必要性

晝間　敬



はじめまして。生命環境科学系・生物部会に准教授として着任しました晝間敬（ひるまけい）と申します。私の研究分野は、植物と微生物の相互作用学です。特に植物の共生菌と病原菌という一見真逆な感染様式を決定づける分子スイッチの理解や、植物が微生物集団をいわば拡張した自己として取り込み自身の環境適応に役立てている仕組みを理解することを目指しています。私は、二〇一二年に京都大学農学研究科で博士号を取得後、ドイツのケルン市にあるマックスプランク植物育種学研究所で日本学術振興会の海外特別研究員として二年間在籍しました。マックスプランク研究所は植物科学に関係する第一線の研究者が世界中から集う場で、様々な専門性を有する博士研究員が在籍しており、それぞれの強みを活かした共同研究は自分だけでは決して到達できない研究水準に導いてくれました。また、その中で頻繁に行われるミーティングや議論は大変充実していて、実際に論文を書く文言などに普段から触れることができ思考を整理できます。それは限られた時間内で第一線の研究成果を出していくために必須な要素だったと思っています。そういった場で二年間博士研究員として滞在できたのは今の自分に欠かすことが出来ない経験でした。今でもなんとか優れた独自性のある研究を進めていこうと試行錯誤していますが、上記の条件を満たす状態になかなか達しておらず、これからの課題となっています。続いて、奈良先端科学技術大学院大学（奈良先）の植物免疫学研究室に助教として六年強在籍しました。奈良先は大学院大学であることから、入学してくる学生の前提となる知識には大きな振れ幅があったものの、交流のあったほとんどの学生は別の大学の院を選ぶという小さな挑戦を経て入学しており、何かを新たに成し遂げたいという思いを秘めている学生が多かったように思います。また、この期間で知り合うことになった同年代の助教や博士研究員の方とはこれから長いこと続いていく研究人生を共に歩んでいきたいと思うほど、優秀かつ素晴らしい方々ばかりでした。

そろそろ、次の場を考えないといけないと思っていたところ、縁あり、東大駒場にやってきました。ここに来るべくして来たという実感があります。というのも、植物微生物相互作用学は、腸内細菌叢の研究のように、宿主と二種類の微生物の相互作用を研究するトレンドから、徐々に、宿主と無数の微生物との相互作用を記述して、その背景にあるメカニズムを解き明かすトレンドへと急速に変化してきています。一方で、無数の微生物が織りなす相互作用を理解していくためには、既存の植物や微生物に関連した学問体系だけではなく、情報学、数理生物学、生態学と行った様々な異分野の教養および融合が必要不可欠です。そういった意味で、駒場の教育が掲げているリベラルアーツはこれからの融合研究の推進にはなくてはならない考え方を示していると思っています。これから、学生、スタッフの皆と単なる欧米や中国の後追いではない独自性の高い研究を行っていきたいと考えています。

（生命環境科学／生物）

この「教養学部報」の記事を転載する場合には、事前に学部報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を学部報委員会までお送りください。無断での転載、転用、複写を禁じます。